２０２２年６月号

東　京　外　国　語　大　学

留学生支援の会

No.70
年3回発行

Ｓｉｎｃｅ１９９９

会報

Pick Up
Event2022

【開催通知】支援の会総会のお知らせ

2022 年 7 月10日10時から支援の会として初めての総会を ZOOM で開催します。

ご多忙とは存じますが、奮ってご参加ください。

なお、出欠の連絡を 6 月 30 日までにお願いします。

URL:https://forms.gle/VefYzV4tKVWZnsbJA

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-2 東京外国語大学留学生支援の会　TEL042-330-5803FAX042-330-5189

http://www.tufsissa.com

Contents

Page1.　１．巻頭言
Page2.　２．ご挨拶
Page4.　３．2022 年度総会について
（１）総会案内
（２）補足事項
Page5.　４.前年度事業・会計報告
（１）事業報告
（２）会計報告
Page8.　５.今年度事業計画・会計予算
(1) 事業計画
（２）会計予算
Page11.　６．会則改正案・役員名簿
Page12.　７．活動報告
（１）書道（習字教室）について
（２）歌舞伎鑑賞教室の準備
Page14.　８．留学生の声
Page17.　９．会員から
Page19.　新入会員・ご寄付御礼
Page20.　幹事会から

FOCUS

１．巻頭言

コロナ禍３年目のオンライン総会開催

留学生支援の会会長　谷　和明

本会役員の任期は2年とされています（会則9条)。私の会長就任は、最初の緊急事態宣言が出される頃でした。それから 2 年経過した今年度、新たな任期を迎えたのに際し、遅まきながらご挨拶申し上げます。

振り返ると 1 年目は、キャンパスから学生の姿が消え、私たち幹事会メンバーの外出も儘ならぬ状況に直面し、従来の事業をすべて中止してのスタートでした。私たちはメール会議を重ねつつ、いかなる支援が必要であり、可能であるかを模索しました。そしてコロナ禍で生活困窮に陥った留学生に対する給付金など緊急生活支援事業をオンラインで実行しました。

2 年目も感染収束の見通しが立たないなか、会員の皆様からの寄付を活用して緊急生活支援事業を量的、質的に拡大しました。とはいえ、前年度とは異なり、事業対象の留学生との対面コミュニケーションの機会を組みこむように工夫しました。また、毎月の幹事会も対面会議で実施するようになりました。会の活動形態が、感染防止至上の段階から with Corona の段階へと徐々に移行してきたといえるでしょう。

この移行をさらに進めていくことが、コロナ禍 3 年目になる今年度の課題となります。今号に掲載した会の事業計画でも、2 年間中断してきた文化・交流事業を徐々に再開することにしています。その第 1 弾として、6 月 5 日に国立劇場での歌舞伎鑑賞教室を実施しましたが、募集開始 2 日で「満員御礼」となる好反応に、コロナ禍の下での留学生たちの文化欲求の高さを再認識させられました。これからも会員の皆様のボランティア協力を得ながら、日本の文化、歴史の理解、社会との交流を深める機会を可能な限り増やしたいと考えています。

来る 7 月 10 日に開催する会員総会も、コロナ禍 3 年目の新たな取り組みです。コロナ禍のもとでのオンライン会議の急速な普及を利用して、これまで開催できなかった総会を実現しようという試みです。総会の意義は、いうまでもなく、すべての会員に会の意思決定への平等な参加、決定の権利を保障することにあります。それにより、with Corona 段階に対応した留学生支援のあり方に関する議論が広がり、深まることを期待します。また、オンライン会議の利用が、大学を拠点に事業実施を担当する在京の幹事、ボランティアと全国各地の多数の会員との交流を可能にし、会の事業、活動への会員の参加の新たな形態の創出につながることも願っています。

初めての試みであり、運営上の不行き届きがあるかもしれませんが、皆さまの総会を皆さまの参加と協力で成功させてください。総会開催の趣旨をご理解の上、万障繰り合わせの上オンライン出席してくださるよう、すべての会員の皆さまにお願い申し上げます。

2. ご挨拶

留学生支援の会第７０号会報に寄せて

留学生日本語教育センター長　鈴木智美

2022 年 5 月、今年も東京外国語大学府中キャンパスでは、瑞々しい緑の木々が初夏の風に梢をそよがせており、多忙な日々の中、この美しい風景にようやく身心が命を吹き返すような気がしています。今、現代の我々が置かれている世界の情勢はますます不穏な種をはらみ、心痛めるニュースも続いています。そんな中で、この留学生支援の会が、東京外国語大学を活動の基点として、常に留学生とともにあるべく活動を続けてきていることに思い至り、改めて感謝と尊敬の念を抱きます。

私はコロナ禍の続く昨年 2021 年 4 月より留学生日本語教育センターのセンター長を務めることとなりました。自身の学術的な関心は、一貫して現代日本語の意味研究にありますが、私の日本語教育研究の発想と実践は、日本語教育との往還の中でもたらされてきたものです。日本語を教えることと、日本語の分析を行うこととは、私の中では両者が 1 つの大きなライフワークの形をとっています。30 年以上も前になりますが、私が日本語教育の仕事の第一歩をスタートしたのは日本国内の小さな日本語学校でした。その後、企業の技能研修生の日本語教育に携わったり、国際交流基金の派遣によりオーストラリア・タスマニア州の高校で日本語教師を務めたりと、様々な場所において様々な日本語学習者に日本語を教える機会に恵まれました。

東京外国語大学に着任したのはちょうど 2000 年で、その後、当センターで 20 余年の間、国費学部留学生の予備教育をはじめ、大学院レベルの国費研究留学生の予備教育、日本語・日本文化研修留学生の教育等を担当し、また東京外国語大学で学ぶ交換留学生や研究生のために全学的に開か

れている「全学日本語プログラム」においては、様々なカテゴリーそして様々な日本語レベルの留学生の日本語教育に携わってきました。業務をほぼ一巡し、再び国費学部留学生の予備教育を担当するようになって数年後、それまで上記のように様々な留学生を対象とした教育業務を担ってきた留学生日本語教育センターですが、業務範囲については 180 度方針が転換し、2019 年度からは国費留学生の予備教育を専従的に担う機関へとその役割が立ち返ることとなりました。

現在、留学生日本語教育センターの教育・運営に携わる教員は、すべて学内では大学院博士前期課程・後期課程の教育・運営、また 2019 年度に新設された国際日本学部の教育・運営を担当しています。留学生日本語教育センター長も、大学院国際日本学研究院の副研究院長、そして大学院総合国際学研究科の副研究科長を兼務で務めています。留学生日本語教育センター長として、国費学部留学生予備教育プログラムの管理運営を行うほか、国費留学生事業を統括する文部科学省との種々の必要な連携業務に携わるとともに、学内においては研究院の運営、および学部・大学院の教育・運営および全学的な種々の運営業務に関わっています。このように、私たちは皆、日々異なる立場から異なる業務を同時並行的に進めていくことが必要となっています。

大学における業務はこのように年々拡大と複層化が進んでおり、本センターにおける国費学部留学生の予備教育においても、近年、内外から変化の波が強く押し寄せていることを自覚せざるを得ません。外的な変化としてまず挙げられるのは、昨今の国立大学を取り巻く状況の変化そのものでもあるとも言え、主として上記にも述べたように人的資源および業務エフォートの配分という形でその影響が現れてきていると思います。一方、内的な変化と言えば、時代とともに留学生にとって留学が意味することやその目的等に広がりが見られるようになり、留学生の気質や勉学の志向性、海外におけるキャリア形成の志向なども実に多様化していることが挙げられると思います。このような内外からの変化は、本センターにおける国費留学生の予備教育の運営と実践にも大きな影響を及ぼすものとなっており、十分な対応が求められるところとなっています。

しかし、留学生の変化というものは、実は時代の流れとともに「留学」ということの新しい意味づけを考えさせられ、むしろ将来への発展の萌芽をはらむものでもあり、けっしてネガティブなものではなく、前向きにとらえてよいことなのではないかと思います。私たちができることはと言えば、おそらく最終的に求められる教育の価値という変わらぬ部分をしっかりと押さえつつ、このようなポジティブな変化に積極的に対応していくことなのではないかと思います。多忙な業務および種々の制約の中でも、最後に拠り所となるところは、教育に対する誠実な貢献と、留学生たちの未来に向けて１つ１つ種をまき育てていくということに尽きるのではないかと思います。

最後に、留学生日本語教育センターの業務には「教材・教授法の研究開発とその普及を通して日本語教育の推進を図る」ことが以前より変わらず大切な柱として掲げられています。かつての一時期、センターでは多様な「教育研究プロジェクト」を実施し、様々な教育研究の萌芽を育て、教材作成など多くの教育研究活動が活発に行われていました。教育研究力の維持発展のためにも、このことの継続的実践を考えなければならないと思っています。

3. 2022年度総会について

来る7月10日、支援の会としては初めてとなる会員総会をZOOM会議形式で開催します。

この件はHP上で4月に予告し、5月末には下記の総会案内を掲載して正式に告知するとともに、アドレスのわかる会員へはメールで通知を差し上げました。とはいえ、おそらく多くの会員の方が本号を読まれて初めてお知りになったことと存じます。それらの方々には、連絡の遅れをお詫び申し上げます。

と同時に、以下の案内等をお読みの上、是非とも初の総会にオンライン出席されるようお願いいたします。

＊総会の議事文書は本号の４～６に掲載しています。

＊「出欠連絡」を6月30日までに所定のフォームで送信してください。

＊「出欠連絡」に記載されたメールアドレスは、今後の会からのメール連絡に使用させていただきます。それゆえ、5 月末に通知メールを受信されていない方は、必ず「出欠連絡」を送信してくださるようお願いいたします。

(1)総会案内

2022年度会員総会(オンライン開催)のご案内

2022年5月27日

留学生支援の会会員各位

東京外国語大学留学生支援の会
会長　谷　和明

新緑の候、会員の皆様方にはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。

日頃より、長期化するコロナ禍における留学生支援活動にご理解とご協力を賜わり、厚く御礼申し上げます。

さて、2022年度会員総会を下記の通りオンライン形式で開催いたします。これは、コロナの下でのオンライン会議の普及を踏まえた、設立以降初めての総会開催への挑戦でもあります。

この特別な意義をご理解され、ご多用とは存じますが、万障お繰り合わせの上、総会参加のために数時間を割いてくださるようお願い申し上げます。

なお、オンライン会議準備の都合上、すべての会員が総会参加の可否について6月30日までに回答くださるようお願いいたします。

記

１　日　時　2022年7月10日（日曜日）
10時～12時

２　場　所　ZOOMを利用したオンライン会議。

３　議　事

（１）2021年度事業報告・会計決算の承認
（２）2022年度事業計画案の承認
（３）2022年度会計予算案の承認
（４）会則改正
（５）役員紹介

以上

（2）補足事項

１)会議進行概要

9：30　参加受付開始
10：00　開会
開会の辞
来賓挨拶
10：30　議案報告、質疑応答、承認
11：30　会員交流の時間
12：00　閉会

２）　総会参加の手順

①参加申込

6月30日までにGoogleフォームで作成した「総会出欠連絡」フォームにより総会参加の可否をお知らせください。そこで、「参加」と回答された方を、総会参加者として登録させていただきます。

「総会出欠連絡」フォームへはパソコン、スマホ等を利用して、以下のURLおよびORコードから

アクセスできます。必要事項を記入して、送信してください。
URL; https://forms.gle/VefYzV4tKVWZnsbJA

②オンライン総会へのインターネット接続に必要な情報の送信。

参加登録された会員には、7 月 5 日までに、ZOOM 会議への接続に必要な情報をメールにて送信します。

③当日の総会参加。

当日 9：30 に、メールで送信した情報を使用してパソコン、タブレット、スマホから接続し、ZOOM によるオンライン総会にご参加ください。

④確認メール等が届かない場合

上に記した確認メール等が期日を過ぎても届かない場合、メールがスパム扱いになっていないかご確認の上、至急下記までメールでご連絡ください。

3）事前質疑

短時間のオンライン会議の制約を補うため、総会議事案件に関する事前の質疑を積極的にお寄せください。

議事案は 6 月 15 日までに、会の HP 上に掲示し、同時に事前質疑の方法、期間についてお知らせします。

4）問い合わせ先

総会に関する質問、ご意見などは、下記までメールでお願いします。

東京外国語大学留学生支援の会　総会担当
Mail: issatufsp@gmail.com

4. 前年度事業・会計報告

(1)事業報告

令和 3 年度事業報告(案)

（令和 4 年 5 月 15 日　幹事会）

新型コロナウィルスの感染拡大により社会活動が制限される中で、留学生等との接触を伴う事業は実施を取りやめ、留学生の生活困窮、留学継続の困難に対応した支援策を実施した。

A 生活支援事業

1 給付事業

(1)新型コロナウィルス感染下での留学生の学び継続を支援する緊急給付金

1）前期

支給者　私費研究留学生 5 名、
給付金金額 10 万円、総支給額 50 万円
①事業の公示、呼びかけ、申請書の配布
6 月 23 日
②申請受付締め切り 7 月 6 日、申請者 5 名
③選考委員会による支給者 5 名の決定
7 月 16 日～22 日
④支給決定者の受給手続きおよび面談
7 月 26 日　連絡室
⑤支給者 5 名の口座への給付金振り込み
7 月 26 日～

2）後期

支給者 21 名（学部 1 名、大学院前期 7 名、大学院後期 10 名、研究生 3 名、うち育児中女性 5 名）、給付金額 5 万円、総支給額 105 万円
①事業の公示、呼びかけ、申請書の配布
11 月 17 日
②申請受付締め切り 11 月 30 日
申請者 38 名
③選考委員会による支給者 21 名の決定
12 月 1 日～15 日
④支給決定者の受給手続きおよび懇談
12 月 19 日　連絡室

⑤支給者 21 名の口座への給付金振り込み 12 月 24 日完了

(2)大学実施のフードパントリーへの協力参加

1)当年度第 2 回フードパントリー

①日時　10 月 28 日 10：00～

②対象（参加）者　200 名（うち留学生は 1 割程度）

③支援の会のブースを設置し、果物（リンゴとミカン）およびムスリム留学生に対するハラール食を手渡しし、学生への声がけ、留学生インタビューを行った。

④会員 7 名が協力した。

2)当年第4回フードパントリー

①日時　2 月 22 日 10：00～

②対象（参加）者　100 名（うち留学生は 2 割程度）

③支援の会のブースを設置し、会からのメッセージを付けた生活応援券（QUO カード 1000 円）を手渡し。アンケートを依頼する。

アンケート回答 39 名（うち留学生 12 名）

④会員 4 名が協力した。

(3)留学生の生活状況に関する情報収集と謝礼

1)「コロナの下での留学」小論文

11 月 24 日に全留学生に告知し、12 月 14 日の締め切りまでに 11 名の投稿があった。投稿者には「生活応援券」（QUO カード 3000 円）を配布した。

2)生活調査アンケート

12 月 27 日に告知し、1 月 17 日の締め切りまでに 65 名からの回答があった。回答者全員に「生活応援券」（QUO カード 3000 円）を配布した。

(4)生活用品などを廉価で提供するバザー

コロナ感染防止のため中止した。

(5)学会発表旅費の助成金を支給

募集したが、交通費補助対象となる学会がないため申請者なし。

2　相談事業

連絡室を閉鎖したためほとんど行えなかったが、HP を通じて生活資金難を訴えた 1 名の学生に、10 万円の特例貸し付けを行った。

B　友好親善事業

実施できず。

C　日本理解事業

日本語広場を対面（留学生子弟 4 名）、ZOOM（客員研究者配偶者 1 名）で実施した。

D　国際理解事業

実施できず。

E　広報その他の事業

1「会報」を 3 回発行

第 67 号(令和 3 年 6 月)　第 68 号(同 11 月)　第 69 号(令和 4 年 2 月)

2　幹事会の開催

幹事会を開催して行事の企画・運営等を審議した。

3　会則･人事

2 月幹事会で徐明煥会員が幹事に承認された。

第 4 回フードパントリーで学生に生活応援券を渡し、会の説明をする幹事

(2)会計報告

留学生支援の会　令和3年度一般会計収支決算　令和3年4月1日～令和4年3月31日(案)

《収入の部》

科目	項目	3年度予算額	3年度決算額	摘要
前年度繰越金		6,390,837	6,390,837	
会費	一般会員	1,728,000	2,835,000	3,000円×165名 6,000円x4名 12,000円×193名
	協賛会員	20,000	80,000	20,000円x4名
寄付	一般	200,000	1,331,000	
その他	バザー等	-	17,000	生活用品売上
	利息	5	4	受取利息
(今年度収入合計)		1,948,005	4,263,004	
収入の部合計(A)		8,338,842	10,653,841	

《支出の部》

科目	項目	3年度予算額	3年度決算額	摘要
活動費 (友好親善事業・相互理解事業)	国際交流行事共催費	-	-	伝統文化体験費・交流会費(大学との共催)
	史跡見学費	-	-	鎌倉見学
	日本文化見学費	200,000	-	歌舞伎見学・ふじの園ツアー
	日本先端技術見学費	100,000	-	先端技術工場見学
	日本文化体験費	50,000	14,464	華道・書道・茶道・日本語広場
	日本人学生との交流会	-	-	茶・菓子・昼食等
	その他の交流活動費	-	-	国際理解教育交通費・謝金
活動費 (生活支援事業)	緊急生活支援金	1,000,000	1,550,000	留学生の学び継続を支援する緊急給付金
	教育研究支援金	150,000	-	学会発表出席旅費補助金
	連絡室協力謝金	50,000	3,000	留学生連絡室協力謝金
	特別生活支援金	500,000	-	(上記緊急生活支援金に含める)
	会報原稿謝礼金	30,000	18,000	3000円×6名
	小論文募集費	-	33,000	生活応援券　3000円×11名
	生活調査費	-	195,000	生活応援券　3000円×65名
	支援協力活動費	-	189,320	大学フードパントリー協力
活動費 (広報普及事業)	通信費	350,000	342,312	会報発送費等 (66号 67号 68号 69号)
	印刷費	300,000	339,075	会報印刷費等 (66号 67号 68号 69号)
活動費(予備費)		450,000	-	
	活動費小計(a)	3,180,000	2,684,171	
運営費	消耗品費	30,000	1,320	プリンターインク代・コピー用紙代
	備品費	20,000	178,407	パソコン購入
	連絡室運営費	10,000	4,438	
	郵便振替手数料	50,000	65,542	
	その他	20,000	23,100	ホームページ運営費
	運営費小計(b)	130,000	272,807	
支出の部の合計(B)	(a)+(b)	3,310,000	2,956,978	
(当期収支差額)		-1,361,995	1,306,026	
次年度繰越金	(A)-(B)	5,028,842	7,696,863	

補足説明

1. 次年度繰越金7,696,863円は次年度以降(4,5,6,7年度)の会費4,005,000円を含む。
2. 予算外の「小論文募集費」「生活調査費」「支援協力活動費」の支出合計417,320円は活動費内他項目の剰余から流用した。
3. 緊急特別貸付金として100,000円の貸付と返還があった。貸付制度は次年度令和4年4月1日に発足し運用を開始する。

監査の結果、内容に相異ないことを認めます。
令和4年5月30日
監事　川口健一　川口

5. 今年度事業計画・会計予算

(1)事業計画

令和４年度事業計画(案)

（令和４年５月 15 日　幹事会）

新型コロナウィルス感染収束の見通しは不確実であるが、いわゆる with Corona に向けて社会的活動の制限が緩和されている状況を踏まえ、本年度の事業計画を以下のような原則で策定する。

（１）コロナ感染下での留学生の生活難、留学継続の困難に対応した支援策は継続する。

（２）感染拡大の 2 年間中止してきた友好親善・相互理解事業を感染収束に応じて企画、実施する。

（３）状況の変化に対応して必要な変更、補足を行う。そのため予算項目の組み替えを柔軟に行う。

A 生活支援事業

1 給付事業

(1)新型コロナウィルス感染下での留学生の学び継続を支援する緊急給付金

給付金 3 万円を 30 名を限度に支給する。実施時期は後期（予算 90 万円）。

(2)緊急生活資金貸付

新設した基金（30 万円）により無利子の短期資金貸し付けをおこなう。

(3)生活用品のバザー

後期に実施する。

(4)学会出席旅費の助成金

計 30 万円を国内外学会参加者に支給する。

2 留学生の協力に対する謝礼事業

(1)留学生の生活実態の調査事業

１）生活調査アンケート

回答者 100 名に 1000 円分の生活応援券を配布する。

２）生活報告小論文募集

投稿者 20 名に 3000 円分の生活応援券を配布する。

(2)連絡室活動の協力者に対する謝金の支給

3 相談事業

相談アクセスの仕組みを拡充する。

B 友好親善事業

1 国際交流事業

「国際交流の夕べ」を 12 月に可能であれば大学と協力して実施する

2 会員等の協力による友好親善事業

ふじのくに留学生ツアーを現地の受け入れ体制が整えば実施する。

C 日本理解事業

1 伝統文化、史跡等の見学

１）歌舞伎鑑賞教室

6 月 5 日に 50 名規模で実施する。

２）文楽鑑賞教室

12 月に 30 名規模で実施する。

３）歴史的都市の見学

学生の企画参加を工夫しつつ、後期に実施する。

2 伝統文化の体験

１）「伝統文化体験教室」

「国際交流の夕べ」に連動して行う。

２）日本語広場の開催

対面式、ZOOM 式の両方で開催を続ける。

3 日本の「今」を知る

後期に可能となれば事業を企画する。

D 国際理解事業

後期に可能となれば事業を検討する。

E 広報・運営事業

1 会報発行

年 3 回刊行する　（第 70、71、72 号）。

2 広報体制の拡充整備

ホームページ等を活用しつつ広報体制の整備をはかる。

3 会員総会の開催

今年度会員総会を ZOOM 会議として開催する（7 月 10 日）。

4 幹事会の開催

大学休業期間を除き、原則として毎月開催する。

(2)会計予算

令和４年度(令和４年４月～令和５年３月)会計予算案

１ 総括表(一般会計および次年度以降会費積立特別会計)

《収入》

科目	金額	摘要
前年度繰越金合計	7,696,863	T1+T2+T3
当期収入合計	2,566,004	N1+N2
収入合計	**10,262,867**	I1+I2

《支出》

科目	金額	摘要
当期支出合計	3,788,000	Ec1
次年度繰越金合計	6,474,867	W1+W2+W3
支出合計	**10,262,867**	E1+E2

２ 一般会計 （次ページに掲載）

３ 次年度以降会費積立特別会計

《収入》

項目	金額	摘要
前年度繰越金から次年度以降会費相当分の繰入(T3)	2,487,000	3千円×829（R4新157×3+4、R3新124×2、R2新106）
新入学会員前納会費(N2)	1,710,000	3千円×570（R4新30×3、R5新120x4）
収入計 (I2)	**4,197,000**	

《支出》

項目	金額	摘要
次年度繰越金（一般会計「会費」への繰出）(W2)	1,623,000	3千円×541（R5新120、R4新161+30、R3新124、R2新106）
次年度繰越金（特別会計）(W3)	2,574,000	3千円×858（R5新120x3、R4新187x2、R3新124）
支出計(E2)	**4,197,000**	

４ 特別会計（外国人留学生貸付基金）

《収入》

科目	項目	予算額	摘要
前年度繰越金		-	
一般会計から繰入		300,000	
貸付金返却		-	
収入合計(A)		**300,000**	

《支出》

科目	項目	予算額	摘要
貸付金		-	
支出合計（B）		**-**	
次年度繰越金	(A)-(B)	**300,000**	

2 一般会計

《収入》

科目	項目	予算額	摘要
会費	繰入（前年度繰越金から）（T2）	1,518,000	3千円×506名（R4新161、R3新125、R2新106、H31新114）
	一般会員（当期分）	576,000	3千円×192名（R4新30、その他会員162）
	協賛会員	80,000	20千円x4名
寄付	一般	200,000	
その他	事業収益	-	
	利息	4	受取利息
経常収入計(Ic)		**2,374,004**	
	うち当期収入小計（N1）	856,004	Ic-T2
前年度純繰越金(T1)		3,691,863	
収入合計(I1)		**6,065,867**	
《支出》			
科目	**項目**	**予算額**	**摘要**
活動費	国際交流行事共催費	300,000	伝統文化体験費・交流会費（大学との共催）
（友好親善事業・相互理解事業）	史跡見学費	150,000	鎌倉など（秋期以降、学生企画）
	日本文化見学費	400,000	歌舞伎教室、文楽教室、ふじの国ツアー
	日本先端技術見学費	-	
	日本文化体験費	150,000	華道･書道・茶道・日本語広場
	各国文化紹介費	100,000	茶・菓子・昼食等
	その他の交流活動費	-	国際理解教育交通費・謝金
活動費	緊急生活支援金	900,000	留学生の学び継続を支援する給付金（30千×30）
（生活支援事業）	教育研究支援金	300,000	国際学会発表出席旅費補助金
	連絡室協力謝金	300,000	留学生連絡室協力謝金
	会報原稿謝礼金	18,000	3千円x6名
	小論文募集費	60,000	生活応援券　3千円x20名
	生活調査費	100,000	生活応援券　1千円x100名
	支援協力活動費	-	
活動費	通信費	270,000	会報発送費等　(70,71,72号)
（広報普及事業）	印刷費	300,000	会報印刷費　(70,71,72号)、角封筒印刷費
活動費小計		**3,348,000**	
運営費	消耗品費	20,000	プリンターインク代・コピー用紙代
	備品費	20,000	
	連絡室運営費	10,000	
	郵便振替手数料	60,000	
	その他	30,000	ホームページ等運営費
運営費小計		**140,000**	
繰出金	特別会計へ繰出	300,000	留学生貸付基金
経常支出計（Ec）		**3,788,000**	
経常収支差額（Bc）		△ 1,413,996	Ic−Ec
次年度純繰越金（W1）		2,277,867	T1+Bc
支出合計(E1)		**6,065,867**	Ec+W1

注　会計予算案の形式改定の要点

本会では簡易な収支計算書を用いて、毎年度の会計報告を行っておりますが、本年度からその形式を変更します。したがって、前年度決算は旧形式で、今年度予算は新形式となっています。

新旧の相違点は、旧形式では「一般会計」のみであったのが、新形式では「一般会計」以外に「次年度以降会費積立特別会計」および「外国人留学生貸付基金」という 2 つの特別会計が加わり 3 本建てになったことです。その目的・理由を簡単に説明します。

（１）「特別会計（外国人留学生貸付基金）」の目的

今年度より、留学生に緊急生活資金を貸し付ける 30 万円の基金制度を立ち上げました。この基金の資金収支を、一般会計の収支から独立して管理するための特別会計です。

（２）「次年度以降会費積立特別会計」の目的

旧形式では前納された次年度以降分の会費（次年度以降の事業に支出される金額）が当該年度の一般会計に会費収入として計上され、次年度への繰越金として処理されました。そのため、毎年の繰越金額が肥大化し、一般会計の収入の名目金額が支出額の 3 倍近くとなり、会の経常収支の実態から乖離するようになりました。

次年度以降分の会費収入を「特別会計」に計上して管理することにより、「一般会計」は会の事業の経常収支の実際の規模を示すものとなります。

（詳細は会の HP をご覧ください）

6. 会則改正案・役員名簿

改正点が分かるよう、付加した文言には下線をつけ、削除した文言には打ち消し線をつけてあります。

東京外国語大学留学生支援の会　会則

2019 年 4 月 21 日制定
2022 年 4 月 1 日一部改正

第1条（名称）

本会は「東京外国語大学留学生支援の会」と称する。これを「東外大留学生支援の会」あるいは「東外大支援の会」と略称することができる。

英文表記は Tokyo University of Foreign Studies — International Student Support Association とし、英文略称を TUFS-ISSA とすることができる。

第2条（所在地）

本会の事務局は東京都府中市朝日町 3-11-1、東京外国語大学（以下、東外大と略記）に置く。

第3条（目的）

本会は、東外大に在籍する外国人留学生、研究者及びその家族への支援、並びに彼らの日本理解を深め、日本人との友好親善を促進する活動を行うことを目的<u>として、1999 年 6 月 12 日に設立</u>する。

第4条（事業）

本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

1. 留学生の生活がより快適なものになるような支援事業
2. 留学生の日本理解が深まり、日本人との友好親善が促進できるような支援事業
3. 活動状況を広く知らせる会報、ニュースレター等の作成と発行
4. その他、本会の目的達成に資する事業

第5条（会員）

本会は国籍の如何を問わず、本会の目的に賛同する者で組織する。会員はいつでも役員会（幹事会）に事業に資する提案ができ、また事業に参加することができる。

第6条（役員）

本会は次の役員を置く。

名誉会長	若干名
顧問	若干名
会長	１名
副会長	２名
幹事	20 名以内
事務局長（幹事長）	１名
会計	１名
監事（会計監査役）	１名

第7条（役員の選任）

役員は次のようにして定める。

1. 会長、副会長、幹事、会計、監事（会計監査役）は総会で出席者の半数以上の賛成をもって選出されるものとする。

2. 役員名簿は年度当初に別表で明示する。

第8条（役員の職務）

役員の任務は次の通りとする。

1. 会長は本会を代表し、幹事会を招集し、議長を務める。

2. 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、会長の職務を代行する。

3. 幹事は総会を構成し、総会の議決に基づき、本会の業務を執行する。

4. 幹事長（事務局長）は総会の議決に基づき、幹事の業務を指揮する。

5. 会計は本会の会計年度の予算案、決算報告案をまとめる。

6. 監事（会計監査役）は本会の会計及び会務執行の状況を監査する。

第9条（役員の任期）

各役員の任期は 2 か年（通常は４月から）とする。但し、再任は妨げない。

第 10 条（幹事会）

幹事会は原則、毎月開催し、総会（幹事団と会員有志で構成する拡大幹事会）は通常、年 1 回開催する。幹事会は議事録を作成し、会員がいつでも閲覧できるようにする。

第 11 条（会報）

本会の活動状況を広報する会報は通常年3回（2 月、6 月、11 月）発行し、必要に応じてニュースレターなどを追加発行する。

第 12 条（事業費）

本会の事業運営経費は会費、寄付金およびその他の収入をもって充てる。

第 13 条（会計年度）

本会の会計年度は４月１日に始まり、翌年の３月 31 日に終わる。

第 14 条（決算報告）

会長は毎会計年度終了後、決算報告書を作成し、総会の承認をうけ~~会員に公表し~~なければならない。

第 15 条（会則）

本会の会則は総会において出席者の３分の２以上の賛成で成立し、かつ改訂できる。

附則

本会則は制定の日（2019 年４月 21 日）から施行する。

別表

2022 年度東京外国語大学度留学生支援の会
役員名簿

名誉会長	中嶋洋子		
顧問	笹岡太一	梅田由美子	杉森弘子
	田中武夫	鮎澤孝子	
会長	谷　和明		
副会長	勝又美智雄	岡田　昭人	
幹事長	井上久美子		
幹事	阿部やよい	大谷達之	河野喜代子
	北村みどり	木全繁	木全玲子
	河野貴光	小平京子	近藤一郎
	佐久間美知	末次透	徐　明煥
	高橋京子	野口久仁子	山崎智子
	山田和子	山根博彦	米山智榮子
会計	阿部やよい		

7. 活動報告

(1)書道(習字教室)について

20 年間にわたり講師として協力いただいている山口先生からの、教室再開への意欲みなぎるご寄稿を掲載いたします。

書道（習字教室）教室について

東京外国語大学支援の会
書道担当　山口隆

いままで、毎年各学期毎週金曜日の午後４時から６時まで国際交流会館の第２会館交流ホールで留学生の皆さんや日本人学生を対象に楽しく書道を行ってきました。

ところがおととしの 2020 年の正月過ぎた頃、コロナが大流行し、やむなく、今日まで中止せざるを得ないハメに落ち入りました。

個人的にも、おととしが書道教室は丁度２０年に当たりまた８０歳にもなり、張り切って春からの書道を始めようとした矢先でしたので、皆さんとお会いできないのが残念でなりません。

しかし今の状況から判断すると、まもなく従来の対面による皆さんの授業も書道の方も解禁になるのでないかと期待しております。(OK が出次第ポスターなどで発表いたします)

皆さんにとって日頃難しい日本語とのとりくみやアルバイトなど大変忙しない生活を続けておられることと思います。

その点、私の書道教室は、本来厳粛なハズのものとは異なりいたって賑やかで且つ無料です。

また、書道に必要な筆、硯、墨、用紙など全部揃っていますので持参するものは一切ありません。ひとつ気晴らしに友人を誘ってご参加ください。日本の学生と親しくなる絶好のチャンスです。

中身は大体次の通りです。

（１）　初めての人には筆の使い方の練習（たて棒、よこ棒、曲線など

（２）　漢字、ひらなが、カタカナの基本的な書き方の練習

（３）　次のステップは、日本の小学生１～６年生向けの漢字、ひらがな、カタカナの組み合わせのテキスト（各６文字）を自分で選んで何度も練習

（４）　最後に自分の出身国、名前を書き入れて提出

（５）　希望によりもっと難しい漢字を書いたり有名な俳句、和歌、唱歌などにも挑戦します。

（６）　漢字クイズなども時々行います。

（７）　文字以外に絵やマンガなど描きたければどうぞご自由に

（８）　毎年１１月下旬に「外語祭」があり、留学生支援の会のバザーを行います。その場を借り、日頃の皆さんの書道の成果を展覧しますので練習をよく積み重ねてください

その他、留学生のほとんどの方は、漢字に最も関心があるようですので、漢字の成り立ちや、中国、台湾、日本における漢字の違いについても説明いたします。

書道には関係ありませんが、私の住む三鷹市や周辺都市には面白い行事イベントなどがたくさんあります。例えば三鷹市内にはジブリ美術館（井の頭公園内）国立天文台、国際基督教大学（ICU)、中近東文化センター、アジア・アフリカ語学院、山本有三文庫（「路傍の石」の作者）禅林寺（作家の森鴎外、太宰治の墓が有名）・龍源寺（新選組の隊長、近藤勇の墓）となりの調布市には深大寺（３月３－４のだるま市で有名）及び隣接の神代植物園、多摩川、武蔵野市の吉祥寺駅周辺の繁華街、アジア大学など。

いずれも、東外大から至近距離にあるので興味のある方はぜひ訪ねてみて下さい。私も都合がつけば、同行またはもっと詳しく説明差し上げます。

（２）歌舞伎鑑賞教室の準備

今回３年ぶりに歌舞伎鑑賞教室を 6/5 に開催することになった。３月初めから２年前の開催資料の調査から始まり学生への通達、支援室での受付、(4/22 から開始、３日で定員）国立劇場との打ち合わせ、最終学生への案内等多岐に渡り作業内容は盛りだくさんだった。次第に支援室の活動が開催される方向に向かっていることを喜ばしく思う。またこれに携わった関係者の方々に感謝するとともにこれをきっかけに学生の皆様が日本に滞在中にいろいろな日本文化を経験されることを期待したい。(詳細は次号でお伝えいたします)

（担当幹事　　山根）

集合写真

8. 留学生の声

私の留学生活

バウレンスカ・マリア
（ブルガリア 大学院博士前期課程）

東京外国語大学　博士前期課程 1 年のバウレンスカ・マリアと申します。

出身はブルガリアの首都ソフィアです。

ブルガリアのソフィア大学日本学専攻に入学して日本語の勉強を始めて、2012 年に京都教育大学に留学しました。

2014 年 7 月にソフィア大学の日本学専攻を卒業してからしばらく国でお仕事をしていましたが、やはりまだまだ勉強が足りないことに気づき留学に挑戦してみようと決めて、2019 年の秋から東京外国語大学で勉強させていただくことになりました。

コロナ禍前だったので、最初の頃は対面授業のみの形式も体験できました。

来日後は、5 か月ほど国際交流会館に住んでいました。

渡日した翌日にさっそく留学生支援の会の方が行ってくださる「バザー」で日常生活に必要な食器や小物などを買いに行きました。来たばかりだったので、生活用品を買いに行く時間も全くなかったのですが、百円ショップよりも安く色々な可愛いものが買えて、本当に助かりました。

2019 年の冬に友だちに紹介してもらい、着付けのイベントに参加することができました。

イベントについて教えてくれた友達は黒とピンク色の着物をすぐに自分で選びましたが、まるでお姫様のようでした。

極度の優柔不断でどの着物にすれば良いのかなかなか決められない私は、着付けをしてくださった方に優しく選んでいただきました。

自分ではいつも桜色や淡い紫など落ち着いた色の方に目が先に行ってしまい、以前、浴衣着付け体験に参加していた時は藤色の浴衣を選んでいたのですが、今回選んでいただいた緑色は着物らしく、とても素敵でした。

着付けが終わったら、自由に大学を散歩しながら写真撮影もできる時間を設けていただいたので、記念写真もたくさん撮れました。

2020 年には感染症が広まり始めたため、授業も全部オンライン形式に変わり、イベントに参加することもありませんでした。

2021 年 3 月に研究生プログラムが終了しましたが、ちょうどそのころ正規学部生・大学院生の方の卒業と重なっている時期でした。着付けと同じように、友だちから袴を着させていただけると教えてもらい、二人で参加してきました。以前から振袖や袴に魅せられていましたが、着る機会がなく、いつかできるとは思っていませんでした。

とにかく赤が似合わない私ですが、着せていただいた振袖が美しすぎたおかげで、写りも最に悪い私でも素敵な写真を撮ることができました。

着付けをしてくださった留学生支援の会の方々はとても優しく、振袖と袴だけでなく、ヘアアレンジの相談などまでして下さいました。

振袖が着れる機会は普段なかなかありませんし、着付けは自分でするのは非常に難しいと思うので、

卒業を迎える大学生・大学院生・研究生のみなさんに是非お勧めします。

性別役割分業に負けず大学院に再挑戦

ハク ビレイ

（中国　大学院博士前期課程）

日本に留学してからもう 12 年目になった。この 12 年間の留学生活を振り返ってみると、大学卒業直後、未熟の私たちにとって、家族を離れて他国で生活することは予想以上に大変なことであった。日本に来るときに、旦那は片言の日本語を話せるものの、私にとって、日本語を話せることが「夢」のようなことであった。そして、二人とも日本語学校に入り、日本語の基礎知識を勉強しながら、大学進学するための資料収集をしたのである。

経済状況が裕福ではない私たちにとって、当時、留学するためにかかる費用が非常に膨大な金額であり、借金に頼る方法しかなかった。そして、二人で先進国である日本を選択し、日本の大学院に進学することに決心し、2010 年の 4 月に日本にきた。

2010 年、日本に来た当時、今と比べ、アルバイトを探すことが大変困難であった。言語能力の問題が一つの大きな壁でありながら、バイト応募できるところも今より少なかったのであろう。同時に、一緒にきた人は 15 人ぐらいで、そのなか、一番早くアルバイトをできた人も、日本にきてから 1 月後になり、遅かったひとは半年以上もかかった。日本に着いた当時、日本語学校で必要な費用等を払って、私たち夫婦ふたりの手元に残った生活費は合わせて 6 万しかなかった。その後、旦那はやっとスーパーでアルバイトができるようになったが、働きはじめてから一か月になってないうちに、言語能力の問題を理由として、継続で働けることができなくなった。その後、蕎麦屋の洗い場の仕事を見つかり、バイトも安定したことで、夫婦ふたりの生活がやっと正式な「軌道」に沿ったのである。2014 年に、二人とも大学院試験に合格し、アルバイトしながら大学院に通った。しかしながら、現実、二人とも同時に大学院に通うことが経済的に大変だったので、私は大学院を中退した。家事とバイトをしながら旦那の学習生活を応援してきた。現在、旦那も大学院博士課程まで進学することができ、息子もそろそろ 5 才になり、保育園で扱ってもらっているために、時間的には余裕ができた。旦那はバイトしながら博士後期課程に通っており、毎月の生活はぎりぎりで、ちょっと大変であるが、自分の最初の夢に向って頑張っているため、充実した毎日を過ごせていると思っている。夫の毎日の頑張っている姿をみる途端に、私も自分の夢に頑張っていくパワーが湧いてくる。

現在、「男性は仕事、女性は家庭」という従来の性別役割分業が一般的な常識として、知らずのうちに、人々の心のなかに定着されているだろう。それにもかかわらず、私も自分自身の最初の日本留学するときの夢に向かって、日本にいる間にチャレンジしてみたいという思いがいつの間にか心のなかに出来た。そして、2017 年から、予め日本の大学で大学院生として進学するために、資料収集しながら受験準備をした。大学院進学試験で最初は不合格であったが、二回目ではやっと進学することができた。今年、大学院の一年目は、科目履修、家庭、アルバイト、保育園などで忙しかったが、大学側から授業料免除制度または留学生の学び継続を支援する生活給付金などのおかげで、精一杯に本を見ることができ、充実した一年を過ごせることができた。

現在社会では、家庭、仕事、社会的な立場によって、男女平等のスローガン、方針を宣伝しているが、現状では、出産や育児に伴い女性が働けなくなることもある。そのため、実際生活上、女性にかかってくる家事、育児の負担が大きい。私の場合も、大学院に進学してから、家庭、仕事、学業などで日々忙しいであるが、充実な毎日を過ごせることができていると思っている。コロナ禍で、今後の生活も予想以上に大変になるかと思っているが、夢をもって、困難を乗り越え、粘り強く頑張っていきたい。

卒業後、日本に就職するか、内モンゴルにもどるか、現在はっきり決まってないところであるが、日本で就職しても、内モンゴルに帰っても、いままで、お世話になった方々への感謝の気持ちをもちながら、日本留学で学んだことを生かしていきたいと思っている。

コロナ禍のもとでの研究と育児

索麗姬（ソルヤー）

（中国　大学院博士後期課程）

2020年早々から、新型コロナウイルス感染拡大という不測の事態に見舞われ、それがあっという間に世界を席巻した。コロナが世界規模で猛威を振るうようになり、各国が次々と封鎖され、国境を 跨ぐ人々の移動が激減した。3月にパンデミックのもと、人びとの仕事や勉強、生活など、すべてのことが新しいスタイルに変わりつつある。こうした変貌しつつある社会状況のなか、私もさまざまな試練に遭い、さまざまなチャレンジを試みた。

私は東京外国語大学大学院博士後期課程に進学後、娘が2015年8月に生まれた。娘の面倒をみながら、勉強・研究してきた。コロナ禍が突如発生し、ウイルスの脅威、規制された不便極まりない生活、とぎれとぎれになっているオンライン授業などに押し付けられただけではなく、娘の保育園登園も一時的に制限された。奨学金がなく、収入がほぼゼロになった私は、以前たん単発のアルバイトも依頼されなくなり、新たなアルバイトをしようと自分の状況に合う求人の情報を探してみたが、見つからなかった。そもそも、さまざまな企業が営業停止ないし倒産され、社会が閉ざされた状態のなか、求人なんてほとんどなかった。私はパニックになって、「これからどのように生きていくか」と、自分に何度も問いかけた。自粛生活のなか、数千キロも離れた両親との電話をとおして、私は心の上で安らぎを感じた。そして娘の笑顔は、私の慰めになった。コロナ禍で外出が難しくなり、大学のゼミと学会もほぼ全部オンラインになった。娘も保育園に行けなかったにオンラインで、保育園の先生たち、お友達と顔を合わせることができた。

2020年6月下旬、緊急事態宣言が解除され、娘も保育園に登園できるようになり、私はやっと勉強に集中できるようになった。

毎日感染対策をしっかりとって、体調に気をつけながら研究生活を送っている。コロナウイルスの関係で外出を控えていることで体力が低下している。研究のためにも体のためにも週一回のストレッチを始めた。最初は慣れなくて、今は習慣化で時間があると、家でもストレッチしている。

博士論文を完成するため、私はもともと 2020年春から中国の内モンゴル自治区とモンゴル国でフィールドワーク調査を実施予定だったが、新型コロナウイルスの脅威で国と国の間は隔絶の状況に陥ってしまい、現地に行けなくなった。コロナウイルス感染症拡大と戦いながら、私は育児すると同時に、日本の各大学の図書館などで資料を集めたほか、パソコンと携帯を通して、中国の内モンゴル自治区と東北地域の人びとと連絡をとり、オンラインで「現地調査」を実施してみた。半年間ほどの調査を経て、幸いにも私はある程度のデータを収集することができた。それを基礎に、私は論文「“伝統”はいかに再現、再創造されたか：映画『ラストエンペラー』における結婚式典、皇后婉容、淑妃文綉の民族衣装を事例に」を執筆した。その論文は論文集『国際的視野のなかの溥儀とその時代』（風響社、2021年2月、117-127頁）に収録され、出版された。

私の専門は民族人類学であり、フィールドワーク調査は研究を進めていくための不可欠な条件である。しかし、新型コロナウイルスがなかなか終息できない状態のなかで、2021年にも私は中国の内モンゴル自治区とモンゴル国に調査しに行けなかった。新型コロナウイルスと共生してくとなったことは、私たちにさまざまなことを考えらせた。人とのふれあいやコミュニケーション、授業、仕事、交通、生活スタイルなどがかわっただけではなく、フィールドワークを含む、研究調査の方法

の見直しも問われている。自ら現地には行けないが、私はいろいろと工夫して、自分なりの調査をおこなった。文字資料とオンライン・インタビューのデータ、写真、録画を収集するだけではなく、私は SNS などで調査地の結婚式の写真と動画を観た。このように、私は研究をすすめるため、コロナ禍のもとでのバルガ人とブリヤート人というモンゴルの結婚式においての花嫁と花婿の民族衣装・服飾の費用、原材料の出所、衣装・服飾の製作、デザイン、布の交換、女性が繋ぐ財産などに関する独自なデータを収集できた。一方、人類学のフィールドワークの一つ重要な部分、参与観察ができていない。コロナが収まったら、通常の研究生活に戻り、早めにフィールドワークに行きたいと思う。

東京外国語大学留学生支援会の生活給付金が私にとってたいへん貴重な助けになっている。今後、しっかりとした研究をおこない、広い社会にその成果を還元したいと思っている。

9. 会員から

ひまわりの花を片手に募金活動

ふじのくに留学生ツアー沼津代表
松下宗柏（長興寺住職）

シェルターからのメール

私は東京外国語大学留学生支援の会と提携して「ふじのくに留学生ツアー」を実施して１２年になる。静岡県が制定している「富士山の日」にちなんで２月２３日をはさむ２泊３日のホームステイのツアーである。

2010（平成２２年）のツアーに参加したウクライナからの日研生（１年留学)、ユリアさんは、３月に再びお寺に滞在した。「日本では寺と神社が平和的に共存しているのはなぜか？また、それが日本の社会習慣や家庭生活の中に、どのように根付いているか？」というテーマの研究レポートの作成のためだった。「他言語を知ることは、もう一人の自分が生まれ、世界が広がる」、また「自分は EC 加入を目指している女性大統領を支持している」とも語っていた。それ以来、彼女とはフェイスブックで繋がっていたが、しばらく連絡が途絶えていた。

今年２月２５日、突然「私はシェルターにいます（I am in the shelter)」というメールが写真と共に届いた。ロシアの友人たちに宛てたものだった。「ウクライナ人は自由です。私たちはロシア軍に救われる必要はありません。ロシア語は私の母国語でもあり、私も家族もキーウ（キエフ）でも東部でも困難を経験していません。私たちは誰とも戦争をしたくない。私たちの土地で平和に暮したい・・・」という悲痛な訴えが記されていた。

その後のユリア

その後の行動について産経新聞デジタル版（３月３日）に「人生最悪の３日間」と題するユリアからの投稿をもとにした記事が掲載された。以下、抜粋し紹介させていただく。

　ロシアのウクライナ侵攻から３日で一週間となり、首都キエフから郊外に避難した市民は恐怖と不安にさいなまれている。キエフで１人暮らしをしていたユリア・サリャヴァさん（３３）は、ロシアの侵攻を受け、近郊のホストメル近くの村へ父親（６２）とともに避難。戦闘激化のためにさらに西部の街に向かう。「生まれ育ったキエフの今の姿をみて、泣きたくなる」。悔しさと悲しみ、怒りが渦巻き、一刻たりとも

心の安まるときはない。「ほとんど眠れていない、疲れています」と。

２月２５日　車でホストメルから約５キロの村の小屋に父と避難した。「３枚の毛布にくるまって寝ている。毎晩、爆発音、戦闘機、ヘリコプター、火災の音が聞こえる。衝撃で小屋が揺れることもある。隣の家は爆撃の被害にあった。夕方にはキャンドルをともし、懐中電灯をつけて過ごす。外に出るのが怖い」

３月１日　近所で食料を運んでいた民間人にロシア軍が発砲。身の危険を感じたユリアさんと父

親は、弟の知人を頼って西部のフメリニツキー方面に避難することを決め、２日、車で６~７時間かけて向かった。道中に見たキエフの街はがれきが散乱。「戦いの場」と化した美しい故郷の街に涙が込み上げてきた。だが強く胸に言い聞かす。「私達はこの困難に耐え、あきらめない。ここウクライナに私たちの家と生活がある」。情勢が不透明な中、日本や世界の支援、そしてロシアへの経済制裁には「心から感謝」しているといい、悲痛な思いを訴える。戦争はどんどん激しくなって、ロシア軍は民間人も狙っている。今はとにかくプーチン（大統領）を止めてほしい」（木村郁子）

その後、ユリアは銃をとる代わりに、フェイスブックを使って発信し続けている。私はメールが届く限り彼女が健在であることが分かり安心している。

「日本に避難し、日本語を使ってウクライナからの難民と日本人との懸け橋になったらどうだろうか」と私は提案したが、「私はウクライナに止まります。母国の復興のために役立ちたい」という返事が返ってきた。ユリアは母国を愛してやまない女性である。

ユリアさん

ひまわりの花を片手に募金活動

ウクライナの惨状はユリアを通して身近なものに感じられた。３月初め、かねて交流のある災害ボランティアの会の代表が「ウクライナ支援のスタンディングを始めます」と挨拶に訪れた。そこで「あわせて募金活動もしたらどうか」と提案した。現在取り組んでいる「命のビザ・杉原千畝夫妻顕彰活動」の人道の精神の実践として私も参加することにした。沼津の国際交流協会のメンバーも参加することになった。

かくしてウクライナの花、ひまわりを片手に募金活動が始まった。「先の大戦の空襲で怖い思いをしました」という年配の婦人、「１00 円でもいいでしょうか」という中学生、中にはお寺に１０万円もの大金を届けてくれた人もいた。寄贈先は「何に使われるのかが目に見える人道支援を」という願いから、ポーランド国境で、避難民やウクライナ国内からの要請にもとづき食料や日用品、パソコンや学用品、医薬品、外科手術器具、発電機などの救援物資を調達して送り続けている坂本龍太朗さん（ワルシャワ日本語学校教頭、３６才）宛てとした。

４月初めには 100 万円に達した。「余りにも胸が痛みます。私たちに何か出来ることはないでしょうか」という人々のウクライナへの思いの結晶である。

テレビ静岡で報道された募金活動の様子

ご入会・ご寄付、ありがとうございます

新規加入者

今期は 177 名もの多くの方が入会してくれました。支援の会としては非常に励まされる思いです。この皆様の思いを学生たちに還元するよう頑張っていきます。

■一般会員（敬称略）

（令和 4 年 2 月 1 日～令和 4 年 5 月 31 日）

相田夢月	相場優冴	朝霧伊安
穴井正剛	アバソルティ美侑	安孫子織絵
天野友結	有馬聡子	安斉香織
安藤ゆりの	飯森愛実	池田徳子
池上結	石川康平	磯田則彦
井出夏希	伊藤涼乃	伊藤千尋
乾恭子	乾真軌夫	岩崎七海
岩本怜於奈	上田千陽	上原規子
上村加奈子	梅澤茉奈	梅本公子
瓜島瑞貴	江口愛花	遠藤康彦
大久保元恵	太田凛乃	大津山祥
大野鉄郎	大橋敏之助	岡寺未来
小川孝	奥田卓郎	小髙謙一
小濃瞳	小野澤美穂	小原知也
笠原涼花	加藤久登	神尾真知子
唐澤優奈	川上陽菜	川﨑泰生
川野悦子	河村隆司	河村英佳
神戸朝	菊入一至	北澤萌
工藤隆司	倉内吹	黒田倫太郎
古池章紀	小泉紗英	古賀茉莉
小林友哉	小林美緒	小柳泰成
小山敏雄	権藤仁基	齋藤大河
斎藤陽向	齋藤未来	齋藤竜太
佐藤天音	佐藤拓輝	佐藤雅樹
佐藤里吏子	佐復みなみ	澤谷浩二
下地莉香子	下山琉瑠	進藤洋輔
末津南	杉本千夏	鈴木敬史
鈴木ちほ	鈴木光	須田涼太
髙島歩美	高野花恋	高橋亜実
髙橋穂香	髙橋実慈	多久島逸平
田口真帆	田口友翔	舘野翠立
松加代子	田中慎也	谷岡広
菜田原碧	塚田麻里加	辻本悠
辻桃奈	坪内伸治	鄭媛
寺澤ゆめ	戸叶萌子	長家由理子
長井蓮	長﨑屋琴美	中嶋未来
中西好恵	中本響	成田ひなの
新島遼一郎	西川豪	錦織優一
西唯我	根岸咲麗	野口陽登
橋本龍	長谷川陽香	長谷川優希
花田結加	濱口賢太	早川賢太朗
林夢乃	原田恵莉	平原真宏
廣郡鈴寧	廣澤康雄	深野永佳
福田拓生	藤原理紗子	星名紗和
星三春	堀夏翠	本間にこ
松尾拓也	松田淳之介	松村康
松本彩	松本久美子	松本圭
松本美穂	三浦紀之	水谷智深
水野光太郎	水野真緒	三角はるか
峯村祐太郎	三宅慧奈	宮崎弘太郎
宮田涼佳	武藤千秋	村上美央
村益将友	茂木真梨菜	本安真紀
森口武史	森帆乃香	門田一音
八坂陽子	安江祐美	安田幸正
矢内望結	柳澤善行	山口智子
山下ちひろ	山地晴日	山本あゆみ
山本康子	山屋有大	吉岡凛
吉田真璃子	若山聡史	渡邉　新
渡辺恭華	渡邉仁菜	渡邊美月

寄付者

今期も多くの寄付を頂きました。幹事一同、皆様のご厚情に励まされつつ、それを留学生に届けるべく支援活動に取り組んでおります。

皆様のご支援に、心からお礼申し上げます。

■一般寄付（敬称略）

（令和 4 年 2 月 1 日～令和 4 年 5 月 31 日）

尾崎正治	河野喜代子	佐久間美知
定本博巳	菅野雅彦	田島美枝
谷和明	田上凛太郎	前田理絵
森泰世	横石邦彦	

幹事会から

（１）幹事会の開催

以下の日程で幹事会を開催しました

2 月 27 日（日）　3 月 27 日（日）

4 月 17 日(日)　5 月 15 日（日）

（２）ご寄付のお願い

コロナは収束状態にありますが、留学生が必要とする支援を継続するため、今後ともご支援、ご協力をお寄せくださるようお願いする次第です。

振込先

ゆうちょ銀行

口座番号　00130-3-192674

加入者名　東京外国語大学留学生支援の会

＊他金融機関からの振込用口座番号は以下になります＊

当座　〇一九店 0192674

（加入者名は同じです。）

注：ゆうちょ銀行での現金振り込みに手数料 110 円が加算されることになりましたが、ゆうちょ口座をお持ちならば、振り込み時に「現金」ではなく「通帳・カード」を選択すると、手数料不要となります。

留学生速報

今年度の東外大在籍留学生数は 591 名です。昨年度と同数で、コロナ前の 3/4 となります。これは、コロナ禍の影響が依然続いていることを示しています。

とはいえ、国際交流会館に居住する留学生数は現在 179 名と、昨年同期の 3 倍近くとなり、コロナ禍からの回復の進展が見られます。

表　2022年度東京外国語大学留学生数（5月1日現在）

所属	総数	課程別内訳		国費・私費内訳		参考　過年度の総数		
		学部	大学院	国費	私費	2021	2020	2019
正規生	402	174	228	105	297	420	426	432
研究生	36	22	14	24	12	37	87	116
交換留学生	128	101	27	0	128	121	129	217
その他	25	25	0	25	0	13	25	31
計	591	322	269	154	437	591	667	796

東京外国語大学公表統計に基づき作成

令和４年５月３１日現在

会員数:876名

すべての活動は、皆様の年会費とご寄付で行われております。本年度会費を同封の振込用紙にてお振込くださいますようお願い申しあげます。

平成 30 年度新入学の会員の皆様は、前納頂いた 4 年間の会費の期間が終了しました。つきましては年度内に会費を納入され、引き続きご協力くださるようお願い致します。

ひとりでも多くの方々の納入のご協力をお願い致します。

一般会員：年会費　3,000 円

協賛会員：年会費 20,000 円

編集後記

今回の会報では歌舞伎鑑賞教室、初めての総会が予定され本来の支援室の活動が徐々に戻ってきた報告ができました。今後もこのような報告ができるように前向きに活動していきたいと思います。またコロナ禍およびお忙しい中、原稿を頂いた皆様に感謝いたします。まだまだコロナ禍の状態が続くと思います。どうか十分ご自愛ください。

（山根）

外国人留学生の原稿は、原則としてそのまま掲載しております

お問い合わせ先

〒183-8534 東京都府中市朝日町３－１１－２
東京京外国語大学国際交流会館 2 号館 1 階
留学生支援の会連絡室

Tel:042-330-5803

Fax:042-330-5189

Mail: ryugakuseishiennokai@gmail.com
Homepage: http://www.tufsissa.com
Facebook: http://www.fb.me.tufs.issa2

当分の間お問い合わせはメールでお願いします。

©Copyright 2022, TUFS International Student Support Association

２０２２年１１月号

東京外国語大学 留学生支援の会

No.71
年3回発行

Since1999

会報

日本文化体験教室のお知らせ。
2022 年 12 月 9 日, 日本文化体験が開催されます。

Pick Up Event2022

連絡先メールアドレスの登録をお願いします（5 ページをご覧ください）。
オンラインによる会の活動ならびに会員相互の交流のためご協力ください。

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-2 東京外国語大学留学生支援の会　TEL042-330-5803FAX042-330-5189

http://www.tufsissa.com

Contents

Page1.　１．巻頭言
Page3.　２．ご挨拶
Page4.　３．2022 年度会員総会報告
Page5.　４．活動報告
(1) 歌舞伎鑑賞教室
(2) 学会出席旅費助成金
(3) アフガニスタン元留学生・家族緊急退避受入への協力
(4) ISEP 留学生歓迎事業
(5) 準備中の事業
(6) 日本語広場から
Page15.　４.留学生の声
(1) 学会参加レポート
(2) 留学生リレー投稿
Page16.　５．会員から
Page17.　新入会員・ご寄付御礼
Page18.　幹事会から

FOCUS

1. 巻頭言

国際日本学部の御紹介

国際日本学部長　川村　大

本学留学生教育への御理解と御支援に深謝申し上げます。この度機会をいただきまして、国際日本学部の紹介をさせていただきます。

国際日本学部は2019年4月の設立、今年ようやくカリキュラムが完成、2023年3月に最初の卒業生を送り出します。前身は皆様おそらく御存じの外国語学部日本課程、2 学部に分かれてからは言語文化学部日本語と国際社会学部日本地域です。大まかに言えば、既存の両学部から日本語・日本地域を切り離して定員と担当教員を大幅増強してできたのが国際日本学部、という関係だと言えましょう。

定員は、「一般選抜」「学校推薦型選抜」「帰国生等特別推薦選抜」の 3 種類の入試で入学した学

生（日本人学生が中心）が 45 名（J1)、留学生が 30 名、計 75 名です。留学生には 2 つのタイプがあって、日本留学試験の成績等と面接で入学した学生（「日本留学試験利用選抜」）が 20 名（J2)、海外の高校を卒業し、その高校の推薦と面接で入学した学生（「海外高校推薦選抜」）が 10 名（J3）です。また、これらとは別に第 3 年次編入学試験で留学生を受け入れています。J1 生には、帰国生はもちろん、学校推薦による入学者にも留学経験者が少なくありません。J2 生はいきおい韓国中国の学生が多数を占めますが、他の国の学生も入学しています。J3 生の出身国はさらに多様で、2022 年現在では、東南アジア・南アジア・欧州・中南米・アフリカ・豪州と、世界各地の学生が入学しています。このように、非常に多様な背景を持つ学生が席を並べて学ぶのが国際日本学部です。

国際日本学部の教育課程の特徴を 3 点に絞って御紹介します。

第一に、「日本を全体的視点から学ぶ」ということです。日本という地域を自明のものとせず、「世界の中の一地域としての日本」という視点から総体として学ぶことを目指しています。1・2 年次の内は社会、文学・文化、日本語教育、日本語の 4 領域にわたって授業を取ることを求めています。これは、旧日本課程の教育方針を引き継いだものと言えます。

第二に、日本人学生と留学生とが同じ授業で学びあうということです。留学生だけを特別なカリキュラムで囲い込むのではなく、日本人学生と同じ授業で学び、討論することを求めています。これも旧日本課程の方針を継承したものであると言えますが、国際日本学部ではここでさらに新方針「全員が日本語と英語で発信できるようになる」を加えています。留学生、特に J3 生は入学時に日本語の能力ゼロでも入学できますが、入学後日本語の集中的な訓練を受けます。一方、日本人学生には英語の授業を多数取ることを求めています。かつ、1 年次の必修科目「導入科目」5 コマはすべて英語による開講、2 年次の選択必修科目「概論科目」10 コマのうち半数は英語による開講です。このようにして、日本語能力ゼロの J3 生を含めたすべての学生が同じ授業で学ぶ環境を保証するとともに、卒業時にはすべての学生が日本語と英語で理解しかつ発信する力を身につけることを目指しています。

第三に、グループワークによる課題解決型の授業「協働実践科目」を複数用意していることがあげられます。1 年次には「多文化コラボレーション」2 コマを全員が履修します。様々な背景を持った学生がグループを組んで、話し合いながら与えられた課題を解決するためのプロジェクトを立案・実践・発信します。2 年時には「社会連携科目」3 コマの内 2 コマが必修です。学外に出て社会の中での学びを体験してもらうとともに、多言語多文化社会としての現代日本の姿を実地に学んでもらいます。このようにして、現代社会の諸問題に主体的に取り組み、発信する力を養うことを目指しています。

担当する教員は約 30 名。旧日本課程担当の教員など、既存両学部の日本関係専攻の教員が本学部の担当になったほか、留学生日本語教育センターで予備教育や全学日本語プログラムを担当している教員も、元の業務を担当しつつこの学部の授業も担当しています。

お察しのとおり、この学部は発足早々2020 年以来のコロナ禍で大打撃を受けました。正規の学部生である留学生が半年以上も入国できない、実地にフィールドワークに行けないなど、当初この学部の魅力として打ち出していたものがなかなか実現できず、苦戦を強いられております。しかしそうした中でも、オンライン教育の長所を生かしながら、「多様な背景を持った学生たちが 2 つの言語を用いながらグループワークなどの学びを展開する」という、この学部の精神は実現していると自負しております。

ようやくコロナ禍も落ち着きを見せ、来年度からは授業の対面化が本格的に実現できる見込みです。この学部の留学生が多数皆様のお世話になることと存じます。今後とも御支援のほど何とぞよろしくお願い申し上げます。

2. ご挨拶

留学生就活支援の現場から

留学生専任キャリアアドバイザー
中村　拓海

グローバルキャリアセンターについて

本学グローバルキャリアセンターでは通常の就職相談に加えて、毎週水曜日に留学生専門の相談窓口を設けています。面接指導やエントリーシートの添削といった一般的な就職活動に関わるアドバイスの他、在留資格の相談やビジネスシーンにおける日本語コミュニケーションの効果的な方法など留学生ゆえに生じる相談も受け付けています。また、学部生や院生だけでなく、交換留学生や研究生の方など所属を問わず利用することができます。もちろん日本語と英語の両方で相談が可能です。

当センターには年間 60 名ほどの留学生が相談に来ますが、その半数以上が２回以上相談を繰り返すので、延数で言うと 100 名を超えます。相談の内容は一人ひとりの状況や希望によって異なりますが、よくある相談内容は下記の通りです。

●日本の就職活動全体のスケジュールと各プロセスについて教えてほしい。

●エントリーシートを書いたので、間違いや改善点がないか見てほしい。

●来週本番の面接があるので、模擬面接で備えたい。

●内定をもらったが、この仕事で就労ビザがもらえるか不安なので確認してほしい。

「何を相談したらいいかよくわからない」という理由で来訪をためらう留学生もいるようですが、話をしているうちに見えてくることもたくさんあるので、是非一度来て欲しいものです。少なくとも日本語会話の練習にはなると思います。また卒業後のキャリアについて少し考えておくと、日頃の勉強や課外活動への取り組みにも良い影響を与えるでしょう。

「ぜひこの会社に入りたい！」という強い希望を持っている留学生の方も当センターで相談を受けることをお勧めします。民間企業が有料で提供しているサービス以上のクオリティを約束します。過去には 30 回ほど相談を繰り返し、外資銀行やコンサルティング企業、最大手の自動車メーカーなどから内定を獲得した留学生もいます。

留学生の就職状況について

ほとんどの留学生は日本の就職活動で苦戦します。私がこの仕事を始めたのも、同級生の留学生たちが日本式の就職活動で失敗し、帰国してしまったことがきっかけです。なぜ苦戦するのか？その原因は主に下記の５つの”不足”です。

１．就職活動で求められる日本語力の不足
２．就職活動に関する情報の不足
３．就職活動に費やす時間の不足
４．就職活動で必要なお金の不足
５．在留資格に関する情報の不足

1.就職活動で求められる日本語力の不足は想像しやすいと思います。10 秒で問題を読み 20 秒で回答するというウェブテストにおける高速処理能力、「学生時代に力を注いだこと」など限られた文字数で理路整然と説明する文章構成力、日頃接しないビジネスパーソンを説得させるような面接でのプレゼン力など、多岐にわたる実践的な技能が高いレベルで求められます。大学の授業や友人との会話とは異なるこれらの日本語に対応できず、選考に落ちてしまうのです。

2.就職活動に関する情報の不足は、いつ・何を・どのようにやればいいのかという話や新卒一括採用のシステム・ルールに関する話などです。これらの知識を日本人学生の場合は先輩や友人などから何となく得られる一方、留学生の場合は受動的に情報を得られる環境にいないことが多いです。

3.就職活動に費やす時間の不足は、就職活動に出遅れたり、授業やゼミで日中の時間が確保しづらかったり、生活費確保のためアルバイトの時間

が削れなかったりなどに起因します。交換留学生や研究生などはそもそも在籍期間が 1 年を下回っており、どう頑張っても時間が足りないという事情もあります。

4.就職活動で必要なお金の不足は、リクルートスーツや鞄、靴、交通費の捻出が難しいという問題です。入社時に運転免許の取得が必須の場合、その教習代が用意できなかったり、引越し費用が工面できなかったりなどの問題もあります。

5.在留資格に関する情報の不足は、在留資格「留学」から就労可能なものに切り替えるための手続きや書類、条件や制約などに関する専門的な知識に関するものです。日本には 30 種類を超える在留資格が存在しており、どういった機関で、どのような仕事に就くかで申請すべきものが変わります。　また仕事内容や会社の経営状況によっては、いずれの在留資格も許可されないケースも存在します。こういった一つ一つの事情を勘案して判断することは、留学生はもちろん普通の日本人にも不可能です。

これら５つの不足を解消することによって、理論的には全ての留学生は日本で就職ができます。しかし、現実的には留学生の就職率は学部生で 40%、院生で 30%程度ですので、いかに５つの不足に就職が阻まれているかがわかると思います。容易に解決できる問題ではないからこそ、経験豊富なアドバイザーに相談しながら卒業後のキャリアを充実させてほしいと願っています。

3. 2022 年度会員総会の報告

会長　谷　和明

前号で告知、案内した今年度会員総会を 7 月 10 日に ZOOM 会議形式で開催しました。

初めての総会

1）　参加者は幹事 11 名、会員有志 11 名と少数でしたが、会則第 10 条にある拡大幹事会を総会とする規定により総会として成立しました。来賓の林佳世子学長および高尾敏史留学生課長から挨拶をいただいた後、予定議案の審議、採択を行い、さらに遠隔地在住の方を含めた有志会員と幹事団との交流を深めることが出来ました。

会議の様子

2）林学長からは、ISEP 交換留学生など非正規生に対する支援、ウクライナ留学生に対する支援、アフガニスタン元留学生及び家族の緊急退避受け入れへの協力への期待が、高尾課長からは、コロナ禍により減少した留学生数を 5 年計画で回復する政府計画達成に必要なきめ細かい留学生支援への期待が、本会に寄せられました。

林学長挨拶

高尾留学課長挨拶

３）総会の案内および審議資料は会ホームページに掲載してメールで連絡し、さらに会報 70 号で全会員に周知しました。ただし開催準備の遅れ、メール連絡可能な会員数の少なさ、会報配送が開催直前であったなど、広報の不十分さは反省事項です。

４）コロナ禍でのオンライン会議の普及を踏まえての初めての総会へのチャレンジでしたが、上述した広報の不十分さもあり、拡大幹事会規模の総会となりました。とはいえ、日頃活動に参加できない会員を交えた有意義な討議、交流の場となりました。次年度以降も、全会員に意見表明の機会を保障するとともに幹事を含めた会員相互の交流を深めるために、定足数や参加者数には余りこだわらず、オンライン総会の充実に取り組む所存です。

なお、2023 年度会員総会の日程、概要等に関しては、決定次第ホームページに掲載するとともに会報 72 号でお知らせします。

連絡先メールアドレス登録のお願い

今回の総会開催の準備の過程で、メール連絡可能な会員が全体の 3 割以下であることがわかりました。今後、総会の案内に限らず、会の事業に関する情報を適時にお知らせするためにメール連絡を活用する予定です。この事情をご了解の上、連絡先メールの登録にご協力お願いします。

支援の会では本年 5 月 29 日に「支援の会本年度総会のご案内」メールを送信しました。e メールを利用されていて、このメールを受信されなかった会員は、お手数ですが、下記の G フォームにアクセスし、氏名、会員 ID（この会報の配送封筒の宛名に記載）、メールアドレスを記載の上、送信してください。送信された情報は会が責任をもって管理し、会からの連絡にのみ使用します。

メール登録用フォーム URL　QR コード

https://forms.gle/tFeqWsAmt2fUXZzUA

4. 活動報告

（1）歌舞伎鑑賞教室参加報告

I.　概要

６月５日(日) １３：３０～１８：００

参加者：留学生 ３０名（留学生の子供１名）　日本人学生１２名　幹事１０名　計５３名

（参加幹事：谷（会長）、井上、河野、米山、北村、久野、小平、河野、百瀬、山根）

12：00　幹事打ち合わせ

13：30　受付開始

14：30 ～ 14：50　「歌舞伎の見方」解説 ： 中村玉太郎

15：10 ～ 16：50　歌舞伎『彦山権現誓助剣』鑑賞

17：00 ～ 18：00　懇親茶話会（館内十八番 にて）

18：00　現地解散

II.　実施経過の説明

＜参加者募集＞

支援の会としては 3 年ぶりに開催することになった。3 月上旬から過去の資料探し、4 月１８日から HP で参加募集、同時に留学生課から留学生全員へ一斉メールを流していただいた。その結果 4 月 20 日で受付完了となった。この件に関しては深く感謝するとともに今後も有効だと思われる事案なのでまたお願いしていきたい。結果として受付終了後、申し込みをしたが参加費未払い 6 名、キャンセル 3 名、近々のキャンセル 3 名、当日のキャンセル 2 名 となり当日のキャンセル以外は引率幹事の協力で補填することができた。

＜当日事前打ち合わせ・受付＞

１２：００に半蔵門線駅近くのサンマルクで事前打ち合わせを行った。１３：３０頃、劇場に予め準備いただいた受付用テーブル、いす、「東京外国語大学 留学生支援の会」という看板をセットして 受付開始。

留学生の集合は順調。受付終了後写真撮影、１４：００には幹事ともども会場内へ。

受付を待つ学生の行列

＜歌舞伎鑑賞＞

１）「歌舞伎の見方」解説 ： 中村玉太郎

若手役者による解説が行われ、留学生がどの程度理解できたのか、気になるところであるが、アンケート結果ではやはり年代も近いのか時にはユニークな場面もあり一部の学生には好評であった。

２）歌舞伎 『彦山権現誓助剣』 鑑賞

毛谷村六助役を中村又五郎、一味斎娘お園役を片岡幸太郎が務める「彦山権現誓助剣」の二幕を

開演を待つ

鑑賞した。印象としてはよく歌舞伎にある仇討の話ではあるが中村又五郎のにらみ、女形という歌伎特有の役割を演じた片岡幸太郎の色気が会場を満たし、歌舞伎特有の殺陣の場面もあり大いに堪能できたと思う。アンケート結果から推測すると英語版のイヤホンガイドがなかったせいか実際の当時の江戸時代の状況（仇討が許される）等の時代背景が難しく実際には十分に理解できない声が多かったように思われる。

＜懇親茶話会＞

鑑賞後 2 階の十八番でクリームあんみつ＋コーヒーまたは紅茶による懇親茶話会を行った。1 テーブル４人で留学生、日本人学生、引率幹事が同席して懇談する予定であったが、コロナ感染対策上１テーブル２名配置とされた。そこで、参加者が全員に自己紹介と感想を述べる形式で、交流を進めた。

離れながらも交流する参加

III.　総括と次回への課題

１-　企画の意義

今回 3 年ぶりに日本伝統文化紹介企画の一環として定例化していた「歌舞伎鑑賞」を行った。これは留学生として日本に滞在するからこそ得られる貴重な機会であり、本企画の意義は大きいものがあると考えられる。今後とも継続することが望ましいと考えるが、対象演劇として常時歌舞伎を選択するのか、それとも時には他にも発展させるかは今後の検討課題としたい。

アンケート結果：皇居、雅楽、落語、お茶（3 件）、人形浄瑠璃、着物（2 件）、富士山、能（2 件）、日本料理、日本音楽、映画、生け花

２-　開催日時選択

前回問題になったラマダンの学生はおらずすべての留学生が美味しいスイーツを堪能できた。ただ本来なら鑑賞後 1 時間（17:45 まで）を 18:00 までに延長してもらった。国立劇場関係者には感謝の念を届けたい。

3- 反省点

反省点としてイヤホンガイド、前回と同じ状況で使えると思ったがコロナの影響で今回は英語版が無いことが受付後判明、学生への再確認に時間を要した。当日の打ち合わせ（国立劇場内の無料休憩所）が使えず近くの喫茶店で行うことになった。初期の段階で国立劇場の方を交えお話を進めていった方がよかったと反省している。また予算も 1～2 万ほどオーバー、これは今後の活動にも影響するが“支援の会”のアピールの問題（留学生交流会とか支援の会の場所を知らない）、メールベースでの情報やり取り(スパムメール Outlook, Gmail)を徐々に解決できる方向にもっていきたい。

（担当幹事　山根）

入り口前でみんな揃ってマスクをかけて

参加学生の感想

歌舞伎感想

総合国際学研究科世界言語社会専攻
グエン ザ トーアイ ユー（ベトナム）

令和 4 年 6 月 5 日に、国立劇場で『彦山権現誓助剣－毛谷村－』というお芝居の演目を鑑賞する機会があった。歌舞伎狂言は、時代物と世話物に大別されるが、今回鑑賞した作品は前者である。公演に入る前に、 中村玉太郎様による解説が行われた。 中村玉太郎様は 20 代の方なので、若者に親しみやすい話し方で歌舞伎に関する基本知識を紹介した。この度の歌舞伎鑑賞は舞台の構造や音楽にという点で感銘を受けた。　まず、歌舞伎ならではの花道は舞台の独特な構造であり、役者と観客との距離を縮める役割を果たしている。例えば、作品の第二場でのお園という人物の初登場シーン。お園は花道の端から、天蓋をかぶりながらゆっくりと六助の門口へ向かってきて、一体どんな人物だろうか観客をドキドキさせた。さらに、六助との対決の予感で舞台裏から見得をする方もスッと現し、このシーンの緊迫感を一層高めた。私にとって、一番印象に残った瞬間である。

舞台の構造とならんで大きな特徴をなすのは、音楽（効果音）である。まるで華やかな俳優たちとの反対で、自分の存在感を消すために黒い着物を着ているが、出現ごとにいつも凛とした姿でツケを叩くのは素敵だった。

歌舞伎鑑賞教室感想文

国際日本後期課程 2 年
柏　匡

2022 年 6 月 5 日、ISSA の招待を受けて東京都千代田区に位置する国立劇場に歌舞伎鑑賞教室に参加しました。今回公演されたのは「彦山権現誓助剱～毛谷村」というタイトルの歌舞伎です。

「歌舞伎の日本語は難しい」と事前に ISSA の方からメールが来ていたので、ネット上の歌舞伎演目案内を読んで当日の演目の内容を予め把握しておきました。そしたら、「彦山権現誓助剱～毛谷村」のあらすじを読んだだけで興味が湧きました。「彦山権現誓助剱～毛谷村」という物語は起承転結にあたる「序破急」でメリハリがついており、一見ありふれた筋書きには実は伏線が敷かれ、最後まで目を離さないような作品だと思いました。原作は十一段からなる長編の時代物で、今回の「彦山権現誓助剱～毛谷村」はそのうちの九段目にあたる一部分であると作品概要に書いてありますが、実際読んだところ相当完成度の高い 1 つのまとまった物語であるというイメージでした。あらすじを読んだ時点での欲を言えば、物語の結末をネタバレされてしまって楽しみが少し減ったといったところでしょう。しかし、ぶっつけ本番では内容が分からない可能性があり、仕方がないことかと思います。

あらすじを読んでから指折り数えてやっと歌舞伎教室鑑賞の日がやってきました。興奮過ぎて集合時間より 30 分も早く国立劇場の前に着きました。最初は人影がまばらでしたが、開演時間が近づきにつれ人が集まってきました。後から知ったのですが、その日は東京外国語大学のグループだけでもなんと留学生 37 名、日本人学生 11 名、そして ISSA のスタッフさん 7 名の合計 55 名が参加していました。予定の時間通りに受付を済ませ、名札をもらい、いざ場内入りましたら、最初に目にふれたのは黒山の人だかりでした。その日は個人客と団体客でほぼ劇場を埋め尽くしていました。席に座って程なくして、待ちに待った「彦山権現誓助剱～毛谷村」が開演すると思いきや、まずは「かぶきの見方」の解説でした。役者の方が手取り足取りで私みたいな歌舞伎初心者に舞台装置や演奏する囃子方などについてやさしく説明してくれました。「見栄」といった歌舞伎の演技など、見る時の楽しみ方まで丁寧に教えてくれました。そして、いよいよ本命の「彦山権現誓助剱～毛谷村」の幕が開きました。百聞一見に如かず、役者さんの一挙手一投足が迫力満点で見る者を魅了してしまいます。物語の展開も程よく繰り広げられていて、最高潮の場面には観客の皆さんが示し合わせたかのように一斉に拍手を送ったりしました。そして気が付けば幕が閉じてしまいました。私はまだまだ歌舞伎の余韻に浸って抜けないでいますが、楽しい時間ほど過ぎるのが早いと嘆くばかりでした。

今回のような貴重な機会を ISSA からいただいて、本当に感謝しかありません。これで日本での思い出がまた一つできたと共に、日本文化に対する興味もまた一つ増えました。

歌舞伎を観た感想

国際日本学部　4 年生
張　瀚元（中国）

6 月 5 日、私たちは歌舞伎鑑賞に行きました！だいぶ前から歌舞伎という日本の伝統芸能を知っていましたが、現場で見るのはこれが初めてになります。「日本文学」という授業でも歌舞伎に関する知識を少し学んでいましたが、やはり「百聞は一見に如かず」、自分の目で確かめたいという気持ちが強かったです。この度、外語会の支援のおかげで、留学生の友達と一緒に国立劇場で長い間やりたかったことができました。

実際に現場にいて歌舞伎役者さんの演技を観てみると、歌舞伎の魅力を一層感じました。生放送のようなもので、間違えることは許されません。そのため、役者さんの臨機応変の能力は大変試されることになります。約二時間の演出で、楽器とステージの変化に合わせてすべてのセリフと動作を覚えることは、とても難しいようで、自分にはとてもできないだと思いました。特に、小川綜真君は、僅か 6 歳なのに、大人にも負けないようないい演技をみんなに見せました。また、中村又五郎さんは、剣術試合で毛谷村六助の強さを演じ、迫力に溢れていました。鑑賞する前に、分からないならどうするという心配があったが、粗筋の書

かれた冊子をよく読んでおくことと、イヤホンから流される解説を聞くことによって、意外に分かりやすいものでした。もちろん、役者さんの演技力もその理解に役に立ちました。専念して舞台の内容を観ていたので、時間の流れが早く感じました。現場で観劇することによって、歌舞伎は芸術性の高いものだと改めて認識できました。

その後、みんなは一緒に二階にあるレストランで日本の伝統デザートのあんみつを食べました。その時、もし着物を着て、歌舞伎を観た後にこのあんみつを食べたら、まるで昔の人のようにではないでしょうかと思いました。もしかして、昔の人の日曜日は、映画を見るかわりに、歌舞伎を観に行って、リラックスするのではないかと想像を膨らませました。また、コロナのため、また対面のマスクなしの会話は避けるべきものなので、あまり友達以外の参加者たちに交流することができなかったが、みんなの笑顔から私と同じように、十分に満喫していることが分かりました。今度、

もし同じようなイベントがあったら、ぜひまた参加したいと思います。

歌舞伎を観に行こう

国際社会学部英語科　4 年生
加藤　なほ（日本）

こんにちは！国際社会学部英語科 4 年で現在、アメリカ・サンディエゴ州立大学に留学中の加藤なほです。今回は、私が 2022 年 6 月に参加した、「歌舞伎を観に行こう」の感想をシェアさせていただきます。

このイベントの醍醐味は、主に 2 つあります。

まず一つ目は、日本の伝統文化である歌舞伎を気軽に楽しめるところです。歌舞伎と聞くと、どこか難しそうでなかなか手を出せない、よく分からないという方も多いのではないでしょうか。私はまさにその一人で、一度だけ歌舞伎を観に行ったことはあるものの、自分からチケットを購入して、鑑賞するということはありませんでした。そんななか偶然、Facebook でこのイベントを見つけ、「楽しそう！行ってみよう！」という心持ちで参加を決めました。演目は「彦山権現誓助剱～毛谷村」といい、剣の達人で主人公の毛谷村六助が、許婚のお園と敵討ちを目指す物語です。上演前、歌舞伎役者の方が舞台のつくりやお囃子の楽器、歌舞伎のポーズなどを説明してくださり、この解説のおかげで歌舞伎の理解を深めることができました。役者の方の力強い声や、お囃子のリズミカルな演奏、観客の笑い声など相まって、臨場感の溢れる上演でした。

二つ目は、何と言っても留学生と日本人学生の交流です。さすが TUFS、世界各国からの留学生が参加していました。実際に、私はこのイベントを通じて台湾と南アフリカからの留学生と知り合い、ご飯を食べに行ったり、現在も連絡を取り合ったりする仲になりました。日本語の響きが好きで日本語の勉強を始めたり、日本のアニメをきっかけに日本への留学を決めたりした留学生の話を聞き、日本の良さや日本文化の奥深さを改めて学びました。自国の文化が、世界の多くの人に愛されていることを目の当たりにし、なんだか嬉しい気持ちになりました。そして私ももっと日本文化を深く知りたいと思います。

ただ歌舞伎鑑賞を楽しんだだけでなく、留学生と貴重な時間を過ごすことができ、充実した 1 日となりました。もし機会があれば、是非皆さんにも参加してほしいと思います。留学生支援の会の皆様、このような機会を作ってくださり、ありがとうございました。今後、またイベントに参加できることを楽しみにしています。

（２）学会出席旅費助成金

5 月 10 日、今年度の「留学生のための学会出席旅費の助成」の申請募集を告知しました。コロナ下で支給対象のない状況が続いてきましたが、対面式の学会開催が増加したことを反映し、7 月 15 日の締め切りまでに国際学会で発表予定の大学院在籍留学生 2 名から久々の申請がありました。両

名とも助成条件を満たしており、それぞれに助成上限の5万円を支給しました。

なお、本助成金の募集は後期にも実施します。

学会終了後両名から提出された学会体験レポートを「留学生の声」欄に掲載したので、お読みください。

（３）アフガニスタン元留学生緊急退避受入への協力

2001年のタリバン政権崩壊後、日本はアフガニスタンの復興、民主化支援のために積極的に留学生を受け入れました。帰国して活躍していた元留学生たちですが、昨年のタリバン復権に伴い深刻な危機に直面しました。そんな教え子たちの窮状を知った本学教員を含む留学時の指導教官が協力してクラウドファンディングで資金を集め、アフガニスタン元留学生とその家族の日本への緊急退避を支援するプロジェクトが立ち上げられました。

7月の支援の会総会では、その発起人の一人でもある林学長から、本学でも2家族20余名を受け入れるので、支援協力をお願いしたいという依頼を受けました。その後の幹事会では、受け入れ窓口となる国際化拠点室やPCSと連絡を取りながら、会として可能な支援を行うことを確認して到着を待ちました。現地の厳しい状況により出国が遅れましたが、最初の家族11名が8月31日に、2番目の10名が10月18日に来日し、キャンパス内国際交流会館の家族室に入居しました。

会では交流会館内の連絡室担当幹事を中心に家族の方々とコンタクトを取り、これまでに日常生活に必要な自転車、衣類、寝具、家具、調理器具、食器などを会の備蓄品あるいは会員の提供によって提供してきました。9月25日には幹事会終了後1番目の家族全員と対面して相互に自己紹介し、困ったことがあれば気軽に相談して欲しいと伝えました。その際、元留学生の父親が「物よりも精神的な支援がうれしい」とおっしゃったのが印象的でした。

両家族とも元留学生夫婦と子供、孫および高齢の親の4世代家族です。育児、通学、進学、就職さらには介護と多様な課題に直面しています。さらに交流会館の滞在期限は来年3月なので、大家族が暮らせる住宅を確保する必要もあります。これらの困難に比して、会が支援できる範囲は非常に限定されています。とはいえ、家族の方々とのスキンシップ的な交流を大切にし、そこから日常の小さなニーズを聞き取りながら、支援の会ならではの支援に取り組んでまいります。

（4） ISEP留学生歓迎事業

1）留学生歓迎会の報告

10月23日の午後2時から2時間にわたり、生協食堂に隣接する円形ホールを会場に、今年度ISEP留学生250名余を主対象とする2022年度新規留学生歓迎会を開催しました。経験値から想定した参加者数を大幅に上回る180名余が15のグループに分かれ、先輩留学生からの歓迎アドバイスやサークル紹介に教員のギター演奏、ゲームなどを交えた楽しい雰囲気の中でグループ活動を通じて国際交流、親睦、情報交換を深め、大盛況のうちに閉会しました。事後も会場周辺で多数の留学生たちが名残惜しそうに談笑する光景が随所でみられ、この集会が大きな成果をおさめたことを実感しました。

今回の歓迎会は、コロナ前に匹敵する220名余のISEP学生が10月までに到着し、国際交流会館に入寮することを踏まえ、それを歓迎しつつ、支援の会の紹介、支援情報の提供、留学生相互および日本人学生との交流・親睦、さらには来日早々の留学生たちの実状、要望を知る機会として企画されました。

このような歓迎会は、おそらく学内でも初めての試みであり、コロナ感染防止ため飲食もでない歓迎会にどれほど参加者があるかも不明ななか、日時・会場決定、内容構成、運営方式、会場内配

置などすべてを手探りで行わなければなりません。それを可能にしてくれたのが、国際交流会館に居住して留学生支援をおこなっている 10 名余の学生チューター諸君の多大な貢献です。

実は今回の歓迎会は、留学生支援の目的を共有しながらも、従来あまり接触のなかった支援の会とチューター間の連携、協力による事業実施の初めての試みでもありました。そのため最初からチューター有志と連絡、意見交換を行い、8 月、9 月のチューター会議に会代表が出席して趣旨説明と協力依頼を行い、開催が迫るとメール、ZOOM での情報交換、協議を重ねました。その際、内容構成や運営形式は留学生と同世代であり、日常的に接触しているチューターチームの意見を尊重し、任せることを基本としました。

開催 2 週間前に実施したアンケートの結果、参加数が相当多くなりそうなので対応が必要であることがわかりました。参加予定数は日々上昇し続け、それにともなって増加する様々な課題に対し、チューターチームは臨機応変かつ献身的に対応してくれました。その柔軟な発想、的確な判断力、行動力に接しながら、改めて外大生の実力に感心させられました。会場収容力の倍以上の参加者という客観的には非常に厳しい状況にもかかわらず、和やかな雰囲気での交流が成功したのは、ひとえにチューターチームの努力の賜物です。

とはいえ、それは想定外の規模になったために増加した様々な問題の解決を雑用や力仕事を含め、ほとんど全て若いチューターチームに負担させてしまったことを意味します。このような問題点を検討し、年齢、経験の点で大きく異なる支援の会スタッフとチューターチームの協力のあり方を考えていくことが宿題として残されました。

支援の会とチューターチームの協力により、低予算でこれだけの規模の集会を成功できたのは画期的といえ、連携、協力の意義、有効性も証明されました。今回の体験を、今後の活動に生かしていきたいと思います。（谷）

開会の辞

多数のサークルがプレゼンしました。

3 名の先輩留学生が体験を語った

歓談する学生たち

クイズ問題理解に集中する留学生

ビンゴ大会

グループで相談してクイズに回答！残念ハズレ

岡田副会長の熱演にスマホキャンドル
で声援を送る学生たち

参加者の感想

A great Experience, definitely again!.

ISEP 交換留学生
Sang Can Güclü（ドイツ）

23.10.2022

Hey! My Name is Sang Can Güclü. I am an ISEP Student from Germany and my stay in Japan is from October 2022 till the end of February 2023. So far, I live here for one month and Japan is amazing. It's not only the politeness and the respect which Japanese people show in front of you, it is also their enthusiasm and energy that amazed me. Next to the well-organized studies at the Tokyo University of foreign studies (TUFS) you can participate at lots of club activities.

Today the Student Help Association organized a welcome party for the new coming international introduction from the tutors, the Student Help Association and students who already lived here before. They gave us tips how to deal with the life here, how to learn the Japanese language faster and how to make the best out of our stay. It was really useful for me. After that, we played games: a Pub-quiz and Bingo. At the pub-quiz, the moderators asked us Japan-related and TUFS related questions. In Bingo, the first winners got nice prices like a camera, souvenirs, books, calendars and so on. At the end of the event, the Association gave us a package full of sweets, which made every student happy.

Thanks for organizing. It was a great experience and I definitely want to participate again!
Much of love

Sang Can Güclü

２）ISEP 留学生アンケート結果

10 月 23 日に開催された歓迎集会の準備作業として、集会の対象者である今年度入学 ISEP 留学生 250 名全員を多少とする簡単なアンケート調査を実施した。

回答期間は 10 月 7 日～11 日と短期間だったが、105 名という高率の回答を得た。その後も回答が届き、最終的に 128 名に達した。

本会事業の主要対象である ISEP 学生の特徴を示す情報を紹介する

１）国籍は 39 か国に上り、ヨーロッパとアジアがそれぞれ 4 割程度とほぼ同数である。正規生に比してヨーロッパ学生の多いのが特徴である。

２）母国大学での学年は学部 3 年が 49%、4 年が 30%と、8 割近くが学部高学年である。

３）日本語での回答者は 14%と、日本語力は低い。初来日者が 54%と半数以上である。

４）参加したいイベントでは、①近郊歴史的都市訪問 93%、③日本人学生との交流 89%、③伝統文化鑑賞 87%が群を抜いて多い。　　(谷)

（５）準備中の事業

これからも生活給付金支給などコロナ禍の生活支援事業を継続しながら、コロナにより中断していた事業にも可能な限り取り組んでいきます。

１）11 月 19 日（土）～21 日（月）には講義棟 103 教室を会場に、外語祭に合わせたバザーを実施します。出品物はこれまでに提供いただき、保管してきた物品を活用します。

２）12 月 9 日（金）には留学生課に協力し、生け花、茶道、着付けなどの日本文化体験教室を開催します

３）12 月 12 日（月）には国立劇場の特別講演「外国人のための文楽鑑賞教室”Discover Bunraku”」鑑賞を実施します。6 月に敢行した歌舞伎鑑賞に次ぐ、日本伝統文化鑑賞教室の第 2 弾となります。文楽鑑賞は初めてでありかつ夜間公演でもあるので、参加定員を 30 名に押さえて 10 月 17 日に募集を開始しました。非常に好評で応募が多かったので、急遽定員を増加し、引率幹事を含め合計 54 名と、6 月の歌舞伎を超える規模になりそうです。

（６）日本語広場から

ABIC の講師派遣事業により長年ご協力いただいた北村先生が本年度 5 月をもってお辞めになり、担当クラスは ABIC のご高配により新たにご協力いただけることになった那谷先生に引き継がれました。

北村先生にお願いして長い広場経験の回想をご寄稿いただきました。以下に掲載いたします。

支援の会日本語広場での指導を振り返って

北村　寛

留学生支援の会が主宰する「日本語広場」は、本学滞在中の研究者・留学生およびその家族を主な対象として、非営利法人「国際社会貢献センター」(ABIC)から講師を派遣し、日本語の指導に当たっています。その対象者たちが日本滞在中に日本語を少しでもたくさん話すことができるよう、手助けをしているものです。

長年、この日本語広場で様々な国の方々と日本語を勉強し、いろいろな交流ができたことは私にとっても非常に貴重な時間でありました。この度、この講師を退くにあたり、過去の記録を見てみる

と、私が担当したのは 21 名、国の数は 14 か国にわたり、多くの皆さんと勉強してきたことに改めて感慨を覚えます。

基本的には、この日本語広場で日本語を勉強しようとする方々は家族の日本滞在に伴い、自らの希望はさておき家族と生活を共にするために来日された方が多かったと思います。従って、過去に日本語学習を経験した方は殆んどなく、大部分の皆さんが 1 からのスタートという状況でした。そんな中いろいろな教材を考え、厚紙でカードを作ったり、漫画の「吹き出し」を空白にしたりしながら皆さんが日本語あるいは日本という国に大きな興味を抱いてもらうべく楽しく一緒に勉強することができたと思っています。日本語が面白くてどんどん短期間で上達する方もいれば、かなり時間をかけてもなかなか・・・という方もいます。語学学習に生まれ付き向いている人、向いていない人の違いもあるのでしょう。でもこの日本語広場ではそんなことは問題ではありません。皆さんがせっかくの日本滞在中に、日本語を学ぼうという意思があり、その結果として日本での時間がより愉快なものとなり、日本に来てよかったなと心底思ってもらえれば、この日本語広場の存在意義は意外に大きなものかもしれません。

私が最初に受け持ったのはオーストラリアからの民俗文化研究者の奥様 D さんとイランのペルシャ語の先生のご主人 R さんのお二人でした。二人とも実に熱心で日本についての質問が多く、日本語の勉強がそっちのけになることも度々ありましたが、それも日本という国に強い関心を持っているからこその話題であり、意義ある時間を過ごせたと思います。このお二人は帰国後もメールを送ってくれ、「あの時間は楽しかったですね。でも日本語はすっかり忘れました。」と言ってきます。でも、楽しかったと言ってくれることは私にとっても嬉しいことです。D さんは滞在中どうしても見学したいと、東京国際交流センター(お台場)で ABIC が運営する日本語広場をわざわざ訪問したこともありました。

内蒙古(中国)からのモンゴル地域の歴史研究者 T さんは日本滞在中の生活がよほど気に入ったと見え、「日本での生活は快適で楽しい経験でした。」と言ってきます。現在は大学の先生をしておられるようですが、日本での生活を懐かしんで、また海外旅行の機会があるならぜひもう一度日本に行きたいと願っているようです。

インドネシアからの D 先生はインドネシア語の先生でしたが、語学の先生にしては日本語の進捗は実にゆっくりで、「うさぎとかめ」の亀さんを思わせるような着実な方でした。支援の会が行うバザーの品かと思われますが、ホールにあったガラスケース入りの日本人形がどうしても欲しいとのことで、支援の会にお願いして大小二体を超特価でお譲りしたことがあります。あの時の D 先生の嬉しそうな顔が私の脳裏にもはっきり残っています。ガラスが割れずに無事届き、インドネシアの居間で興を添えているでしょうか。

ドイツのご夫婦 A さんと M さんは、帰国後にドイツの街中で見かけた漢字の写真を送ってきて、「この日本語はいったいどんな意味なのか?」と。よくよく見るとそれは日本語ではなく中国語でした。漢字という文字に接したときの欧米人の反応を垣間見たような気がしました。

私が最後に受け持ったのはカザフスタンの三姉妹とタジキスタンの男の子でした。子どもを受け持ったのはこれが初めてでした。コロナ禍の中、お休みすることが多く、満足に勉強できなかったことに心残りは若干ありますが、後任の講師と共に楽しく勉強していくことでしょう。

日本という国に数年滞在した方々が、将来もそのことを楽しく懐かしんでくれること、或いは場合によりそのことを誇りに思ってくれることを願って、退任に当たっての回想文といたします。会長はじめ支援の会の皆様、有難うございました。

4. 留学生の声

(1)学会参加体験レポート

研究への刺激を得た学会デビュー

JIA YANG ジャムヤン（中国・チベット）

学会名　第 16 回国際チベット学会(IA T S)
開催地　チェコ･カレル大学
期　日　2022 年 7 月3日～9日
テーマ「古代･中世チベットの環境保護意識について」

７月３日、私は上記のテーマのもと、以下の内容について口頭発表を行った。

1950 年以降、チベットを中国政権の領域に取り入れられ、社会全体が一変させた。それに伴い、チベットではこれまで受け継がれてきた伝統文化が破壊され、続々と新た政策が展開され、現地住民であるチベット人に前代未聞の恐怖にさらされた。また、工業産業と市場経済のため、自然資源を勝手に発掘された結果、自然破壊と環境汚染など問題が引き起こされた。それに対して、中央政府が現地住民であるチベット人の過放牧が環境破壊の主な原因であると断言し、中国独自の環境保護政策を実施した。

しかし、今回の口頭発表内容は中央政府が実施した環境保護政策には期待通りの効果が見られなく依然として課題の残っており（①牧畜民の移住先の不適応。②伝統的な牧畜文化の喪失。③牧草地の過少利用による過疎化などがあげられる)、これら諸課題を解決するにはチベット独自の伝統的な環境保護意識は有効であることを１宗教的な側面、２チベット王朝時代の法令、３民俗の三つの側面から解釈した。

私にとって学会デビューである国際チベット学会では、初めての公の場での発表ということで緊張してしまったが、とてもよい機会を与えていただいた。研究内容は異なるにせよ、多くの研究者の方々の発表を聴くことができた。皆さんが自分の研究をとことん追究していて、素晴らしいと感じたとともに刺激になった。言語の壁と知識不足のために、 理解が難しかった演題も多かったが、興味のあったものについては自分でも今後勉強してみようと思う。そして、今回の学会で学んだことをこれからの研究に活かしていきたい。

様々な研究者との出会い

大学院世界言語社会専攻
エンフアムガラン　オノン　（モンゴル）

2022 年 9 月 3 日モンゴルの首都ウランバートル市に「日本・モンゴル両国の教育、文化、スポーツの分野で共に歩んだ 50 年を振り返って」テーマで国際学術シンポジウムがモンゴル国立大学図書館 502 号室で行われました。

今回のシンポジウムの目的は、モンゴルが社会主義体制から脱却し、民主化した新生モンゴル国になってから、日本との関係が飛躍的に改善されました。その結果、経済、ビジネス、文化、スポーツなどの多くの分野における協力関係が大きく進歩し、目に見える成果を収めています。日本・モンゴル両国の教育、文化、スポーツの分野における長期の友好交流と協力関係を振り返ることを目的で、モンゴルと日本の将来を担う若い世代の相互理解を深め、今後の更なる協力関係を促進するきっかけになることを目標のひとつにしています。

シンポジウムの内容は、セクション 1.「日本と

モンゴルの言語教育に関する成果と経験を語る」、セクション 2.「文化、芸術の分野における協力関係を振り返る」、セクション 3.「日本とモンゴルのスポーツと観光産業の展望」、セクション 4.「その他」です。

私の発表はセクション 1 で「日本語母語話者のモンゴル語学習者に対してモンゴル語の名詞複数接尾辞に関する教授法について」というテーマで発表を行った。

質問もいくつか頂き、有意義な発表会になりました。さらに、言語学、教育の分野の様々な研究者、教授とお目にかかれることができ、このような貴重な機会を与えてくださった東京外国語大学留学生支援の会の皆様のお陰です。心より感謝申し上げます。引き続き、研究に熱心に取り組で参りたいと思います。

(2)留学生リレー投稿

富士山の旅行

プレンデロヴィッチ・イリナ（ウクライナ）

来日するたびに、いつも不思議な点がみつかります。今年、ISEP 留学生として東京外国語大学に入学しました。授業以外、時間があれば、旅行したり、友達と一緒に時間を過ごしたり、美味しい料理を食べたりします。今、まだ暖かいので、日本街の散歩や自転車運転も楽しいです。歩いたら、綺麗な象や松も気づいて日本ならではの雰囲気ですね。もうすぐ紅葉も始まるので、本当に見られたいです。

確かに日本の自然はとてもきれいです。大学から富士山も少し見られるので、いつも見ると二年前の旅行を思い出します。

２年前に富士山のくに留学生ツアーに参加して、本当に貴重な経験をもらいました。新しい知り合い、料理、綺麗な富士山、その美しさはまだ心の中で残っています。その旅行は２日かかったのに、たくさんのとことも案内してもらいました。お寺、博物館、滝、富士山の周りに散歩、水族館、日本の家族のうちで残って、お茶を飲みながら、真夜中まで話し合いました。富士山はその近く見ると驚きました。宜しければ、今年絶対に登りたいです。

5. 会員から

会報の編集を担当して思うこと

幹事　山根博彦

2021 年の 11 月号より前任の木全幹事から会報を受け継いで、今回で 1 年が経過した。最初に受け持った会報(No.68)を読み返してみると、この頃はまだコロナ禍の中の真っ最中であり、経済的に困窮している学生に対してのサポート（給付金、フードパントリー）などの内容が多かった。次号も同様にコロナ禍の学生に対する原稿が多く、残念ながら毎年行われているバザーの中止のアナウンスもあった（No.69)。

6 月号（No.70）では支援の会として初めて取り組む“2022 年度総会について”アナウンスされ、7 月に少人数であったが総会が開催された。また、学生に対しても 3 年ぶりとなる日本文化体験事業である歌舞伎鑑賞教室を 6 月 5 日に実施し、多数の留学生、引率幹事と共に楽しい時間が共有でき、今号では嬉しい報告ができた。そして、日本文化体験第 2 弾として、12 月 12 日には”文楽鑑賞教室“を実施する運びとなった。

さらに、これも初めての試みである ISEP 留学生歓迎会を 10 月 23 日に開催し、今号で報告されているように予想をはるかに上回る 180 名ほどの学生の参加を得た。これが 12 月 9 日、やはり 3 年ぶりに大学で開催される文化鑑賞教室の呼び水になることを期待している。

このように会報を編集しながら支援の会の動向を一回立ち止まって回想できることは、編集者の特権だと思っている今日この頃である。

ご入会・ご寄付、ありがとうございます

新規加入者

今期は 3 名の会員を迎えました。うち 1 名は中国出身の元本学留学生です。

この一年間の元留学生の入会は 3 名となり、会員の多様化、国際化が進んでいます。

■一般会員(敬称略)

（令和 4 年 6 月 1 日～令和 4 年 11 月 2 日）

蜂巣敦史　今井昭夫　孫国鳳

寄付者

今期も多くの寄付を頂きました。幹事一同、皆様のご厚情に励まされつつ、それを留学生に届けるべく支援活動に取り組んでおります。

皆様のご支援に、心からお礼申し上げます。

■一般寄付(敬称略)

（令和 4 年 6 月 1 日～令和 4 年 11 月 2 日）

渥美正樹　跡部いずみ　鮎澤孝子　安藤浩行
五十幡圭右　板久恭子　井上東一・久美子
梅田由美子　大島勇次郎　加賀晴子　金井亜津子
川上美樹　河野喜代子　北川哲也　挙市玲子
鴻野初恵　小島照恵　定本博巳　佐藤桂子
新堂睦子　鈴木文子　鈴木正道　関口洋子
高木幸子　髙橋元　寺田朗子　原田史恵
疋田妙子　本望春夫　松田素子　三田龍彦
道原雄斗　村上光一　山田和子　横石邦彦
吉田展子

幹事会から

（１）幹事会の開催

以下の日程で幹事会を開催しました

7 月 24 日（日）　9 月 25 日（日）

10 月 23 日(日)

（２）ご寄付のお願い

コロナは収束傾向にありますが、ポストコロナ時代の新たな課題への取り組みを進めるためにも、今後ともご支援、ご協力をお願いします。

振込先

ゆうちょ銀行

口座番号　00130-3-192674

加入者名　東京外国語大学留学生支援の会

＊他金融機関からの振込用口座番号は以下になります＊

当座　〇一九店 0192674

（加入者名は同じです。）

注：ゆうちょ口座をお持ちの方は、振り込み時に「現金」ではなく「通帳・カード」を選択すると、手数料不要となります。

令和４年 11 月 2 日現在

会員数:876 名

すべての活動は皆様の会費とご寄付で行われます。本年度会費を同封の振込用紙にてお振込くださるようお願いいたします。

平成 30 年度新入学の会員の皆様は、前納頂いた 4 年分会費の期間が終了しております。年度内に会費を納入され、引き続きご協力いただければ幸甚です。

ひとりでも多くの方々の納入のご協力をお願い申し上げます。

一般会員：年会費　3,000 円

協賛会員：年会費 20,000 円

既にお振込みの場合、失礼をご容赦ください。

編集後記

今回の会報ではようやく本来の支援の会の活動の報告ができました。今後もこのような報告ができるように前向きに活動していきたいと思います。またコロナ禍およびお忙しい中、原稿を頂いた皆様に感謝いたします。まだまだコロナ禍の状態が続くと思います。どうか十分ご自愛ください。

（山根）

外国人留学生の原稿は、原則としてそのまま掲載しております

お問い合わせ先

〒183-8534 東京都府中市朝日町３－１１－２

東京京外国語大学国際交流会館 2 号館 1 階

留学生支援の会連絡室

Tel:042-330-5803

Fax:042-330-5189

Mail: ryugakuseishiennokai@gmail.com

Homepage: http://www.tufsissa.com

Facebook: http://www.fb.me.tufs.issa2

当分の間お問い合わせはメールでお願いします。

©Copyright 2022, TUFS International Student Support Association

２０２３年２月号

東　京　外　国　語　大　学

留学生支援の会

No.72
年3回発行

Ｓｉｎｃｅ１９９９

会報

春のバザー開催/4 月 6 日(木)～4 月 7 日(金)
ボランティア募集！バザーの準備や当日販売を行う人手が足りません。

Pick Up Event2023

2023 年度総会通知
7 月 9 日、第 2 回支援の会総会を開催します。
(3 ページをご覧ください)。

〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-2 東京外国語大学留学生支援の会　TEL042-330-5803　FAX042-330-5189

http://www.tufsissa.com

Contents

Page1.　１．巻頭言
Page3.　2023 年度総会のお知らせ
Page4.　２．ご挨拶
Page5.　３．活動報告
(1) 外語祭バザー活動報告
(2) 日本文化体験教室
(3) 伝統芸能鑑賞教室
(4) 大学フードパントリー
(5) 生活支援事業の継続
(6) アフガニスタン元留学生・家族への支援
(7) 準備中の事業
Page12.　４.留学生の声
(1) 留学生リレー投稿
(2) 小論文
Page17.　５．会員から
Page18.　新入会員・ご寄付御礼
Page19.　幹事会から
Page20.　春季バザー開催

FOCUS

1. 巻頭言

ポスト・コロナ時代の留学

東京外国語大学　教育担当副学長
青山　亨

2020 年 1 月に国内で最初の新型コロナウイルス感染者が確認されて 3 年が経ちました。この間、数回にわたる緊急事態宣言が発令され、コロナ禍は私たちの生活に大きな影響を与えてきました。今年に入って、政府は 5 月を目処に新型コロナの感染症法上の分類を 2 類から 5 類に引き下げることを決定し、新型コロナも季節性インフルエンザと同等に扱われる段階へ入ろうとしています。私たちは名実ともにポスト・コロナの時代を迎えたと言えるでしょう。

東京外大はコロナ禍が始まった 2020 年の春学期に全面的にオンライン授業の導入に踏み切り、教育を中断することなく続けることができました。その後、状況に応じて対面とオンラインの組み合わせに移行し、2021 年の春学期からは、おおむね対面 7 割、オンライン 3 割の授業編成になって現在にいたっています。

しかしながら、授業はオンラインで対応できたとはいえ、留学については、渡航制限のために、送り出しと受け入れの双方で、多くの学生たちが、期待していた留学を断念したり、当初の計画を変更したりすることになり、大変に残念に思います。本学が受け入れる留学生たちの渡日が順調に進むようになったのは、ようやく 2022 年の春になってのことでした。

東京外大では、2022 年度から新しい試みとして『教育白書』を作成しました（大学のウェブサイトからご覧いただけます)。

http://www.tufs.ac.jp/abouttufs/public_info/ir/education/

この 27 ページに受け入れ学部留学生の国籍・地域別の数の推移がまとめられているので、これを参考に、現時点で分かる留学生受け入れへのコロナ禍の影響を振り返ってみたいと思います。

コロナ禍の前まで、受け入れ学部留学生の数は毎年順調に増加しており、2019 年度には最多の 509 名に達していました。国籍・地域別で最も多いのは中国からの 132 名で、これに韓国の 87 名、ブラジルの 31 名、ロシアの 20 名が続き、そのあとタイ、米国、モンゴル、フランス、台湾、イギリス、スペインと 10 名台の国・地域が並びました。ちなみに、留学生の出身地は 64 か国・地域でした。ところが、コロナ禍が始まると、留学生の数は 2020 年度に 393 名、2021 年度に 317 名にまで減りました。2022 年度になって少し持ち直し 322 名になりましたが、これでもまだ 2019 年度の 6 割程度にしかなりません。2021 年度には留学生の出身地も 46 か国・地域に減少しています。これは、留学生の数がゼロになった国・地域が少なくないこと、結果として留学生の出身地の多様性が損なわれたことを意味しています。

興味深いのは、2022 年度でも韓国とブラジルからの留学生はそれぞれ 87 名と 26 名で、コロナ禍にあっても数はさほど減ることがなかったのに対して、中国からの学生は 39 名にまで激減していることです。2019 年度と比べると 2022 年度の留学生数はマイナス 187 名ですので、減少数の半分は中国からの留学生が占めていると言えます。これには中国のコロナ政策の影響によるところが大きいと推測されます。2023 年度にはぜひとも受け入れ留学生数がさらに回復することを期待しますが、そのためには、コロナ禍の間に「失われた」国・地域からの留学生が戻ってくること、中国からの留学生の数が回復することなどがポイントだと言えるでしょう。

ポスト・コロナ時代を迎えるこの機に、コロナ禍の 3 年間を振り返ってみると、大学の教育や留学のあり方に大きな変化が起こったことに気づきます。教育においては、オンライン授業が特別なことではなくなりました。すでに述べたように、現在の授業編成のうち 3 割を占めるオンライン授業は、オンラインで開講することに意義があればこそのオンライン授業です。たとえば、100 人を超える多人数の講義であっても、オンラインを活用することで、教員と学生の間には対面以上の豊かなコミュニケーションが成り立ちます。あるいは、本学を含む国内の互いに遠方にある複数の大学の学生たちが、オンラインで共同開講した授業に参加して共通のテーマについて討論を重ねています。また、海外の協定大学と連携して、現地の先生がオンラインで本学の学生に授業をおこなう国際共同教育が始まっています。

最後の例は、単に言語を学んだり、知識を得たりするだけの留学であれば、オンライン授業で代替できることを示しています。言い換えれば、これからの留学は、オンライン授業には代えられない学びの機会でなければならない、ということになるでしょう。それは、現地の社会で実際に人々と交流し、場を共有しながら五感を駆使して見聞することで、自分の物の見方や感じ方が揺さぶられ、大きく変わるような「体験」の機会であると言ってよいと思います。このような体験を提供することで、オンライン授業とも補完しあう、ポスト・コロナ時代にふさわしい留学が実現するものと考えています。渡日する留学生たち一人一人が素晴らしい体験を得ることを念じて、留学生支援の会の皆様にもさらなるご協力をお願いいたします。

2023年度会員総会（オンライン開催）のご案内

2023年2月17日

留学生支援の会会員各位

東京外国語大学留学生支援の会
会長　谷　和明

春寒の候、会員の皆様方にはますますご清栄のこととお喜び申し上げます。
日頃より、本会の留学生支援活動にご理解とご協力を賜わり、厚く御礼申し上げます。

さて、2023年度会員総会を下記の通りオンライン形式で開催いたします。昨年に引き続いて総会開催への第２回目の挑戦となります。総会という形式、名称にはあまり拘らず、日頃お会いできない全国各地の会員のご意見を伺うとともに、会員相互の交流を少しでも深める機会としての内容的な充実をめざします。
この趣旨をご了解され、ご多用とは存じますが、万障お繰り合わせの上、総会へのオンライン出席に時間を割いてくださるようお願い申し上げます。

なお、オンライン会議準備の都合上、すべての会員が総会参加の可否について6月30日までにご連絡くださるようお願いいたします。

記

1　日　時　2023年7月9日（日曜日）　10時～12時
2　場　所　ZOOMを利用したオンライン会議
3　議　事
（１）2022年度事業報告・会計決算の承認
（２）2023年度事業計画案・会計予算案の承認
（３）その他
（４）役員紹介

以上

総会参加の手順

①参加申込

6月30日までに所定の「総会出欠連絡」フォームにより総会参加の可否をお知らせください。「参加」と回答された会員を、参加者として登録します。

「総会出欠連絡」フォーム

URL；https://forms.gle/o17RvtkehvLwawgDA

②オンライン総会接続情報

参加登録された会員には、7月4日までに、ZOOM接続に必要な情報をメールにて送信します。

③当日の総会参加

上記情報を使用して、当日10：00までにオンライン総会に出席ください。

④議案など総会資料

総会資料は6月下旬配送予定の「会報」73号に掲載します。それ以前にも会のHPに総会資料を順次掲載いたしますので、ご覧ください。

2. ご挨拶

留学生支援に懸ける想い

東京外国語大学大学院博士前期課程修了
孫　国鳳

私は留学生支援の会が設立された 1999 年の前年の 1998 年に博士前期課程（地域文化研究科アジア第一専攻）を修了しました。博士後期課程は東京大学へ進みましたが、2002 年まで東京外国語大学百年史編纂委員会大学史資料室の教務補佐員として大学史編纂の業務や大学独立百周年（建学百二十六年記念）の諸行事のお手伝いをしました。母校の大学史編纂委員会資料室の一員として働くことができたことを光栄に思います。

東京大学の博士後期課程修了後、公益財団法人大学セミナーハウスに就職し、セミナー事業に携わりました。このまま日本に留まるか、中国に帰国するか迷っていた時、大学セミナーハウスが留学生支援事業という新事業を起こし、私がその担当者になりました。当時は中曽根康弘首相が提唱した「留学生受入 10 万人計画」（提唱は 1980 年代）が達成されたものの、外国人留学生の勉学や生活等、解決すべき問題が山積していた時期でした。

最大の問題は、留学生の住まいの問題でした。2005 年、大学セミナーハウス創立 40 周年を契機に、敷地の一角に留学生会館（計 25 室、18 ㎡の個室）を建設し、留学生支援事業を開始しました。留学生会館は、様々な国から来日し近隣の国公私立大学に通う留学生や研究者が入居し、毎年満員御礼でした。私は入居者の方から、バイト探しや人間関係の悩み、進学の悩み、論文添削など、日々様々な相談を受けました。自分が日本語で書いた論文が公表できるレベルのものなのかどうか、という学術的な相談もよく受けました。私も学生時代、同じ問題で悩んでいたので、彼らの悩みはよく理解できました。留学生が日本語文章力を磨く機会を得られるよう、2009 年から大学セミナーハウスの留学生支援事業として留学生論文コンクールを開催することにしました。留学生論文コンクールは、留学生新聞のご協力や、文部科学省、外務省、国際交流基金、国際留学生協会のご後援を受け、今日まで続いています。

昨年 3 月、私は大学セミナーハウスを退職しました。私も高齢となり、十分な仕事はできないかもしれませんが、今までの経験を活かし、留学生支援の会の活動に関わらせていただき、母校への恩返しをしたいと思っています。

思い返せば、留学生支援の会設立後最初に開催された鎌倉史跡観光ツアーにも参加させていただきました。私にとって初めての鎌倉旅行で、ガイドの方のご案内で鎌倉の観光史跡（大仏、建長寺、鶴岡八幡宮）を巡り、昼食には鎌倉五山の精進料理を食べました。当時支援の会の幹事をされていた黒田隆さんと親しく歓談したことを今でも覚えています。黒田さんは子供さんが東京外国語大学の卒業生で、そういったご縁で支援の会の幹事になったとうかがいました。

留学生支援の会初期の活動内容は、留学生の日常生活支援や日本理解及び交流の場の提供、友好親善行事の開催等でした。当時の学長、中嶋嶺雄先生が会の設立を支援し、学長ご夫人の中嶋洋子先生が初代会長を務め、大学教員の先生方や大学職員の方々、卒業生や卒業生の保護者の方々が会員として設立したボランティア団体であるとうかがっております。設立後 24 年間、会の活動が継続してこられた背景には、会員の皆様のご厚意とご支援があったからこそだと思います。私も会の支援を受けた留学生の一人として感謝の念に堪えません。

先日支援の会の幹事会に参加し、現会長をはじめとする幹事の皆様が熱心に活動を企画し、活動の実践にも詳細な配慮をされていることを知りました。コロナ禍でも ISEP 留学生歓迎事業（2022 年 10 月 23 日）が盛況に開催されたことに敬意を表します。2022 年度も外語祭でのバザー（11 月 19 日～21 日）、伝統文化体験教室（2022 年 12 月 9 日）等、多くの事業が遂行されました。恒例の鎌倉史跡見学ツアー（担当リーダーは幹事の河野

貴光様）や春期バザー等は現在企画中のようです。幹事の方々の献身的なご活動にただただ感服するばかりです。

留学生の一番の悩みと言えば、いつの時代も孤独感とホームシックです。留学生は異文化の中で自分がどう考え、どう行動すべきか迷う場面も多く、そんな時に気軽に相談できる窓口があれば勉学にも自信を持って取り組むことができるのです。日本での勉学が成功する学生もいれば、失敗してしまう学生もいます。日本での勉学が成功した学生は、留学経験が人生の良き思い出となり、帰国後も知日人として活躍します。一方、日本での勉学が失敗してしまった学生は日本での経験を人生の汚点として脳裏に深く刻むことになり、母国に帰った後も日本のことを口にすることはないようです。2019 年、留学生の総数は 30 万人に達しました。留学生数の増加に伴い、より手厚くより的確な留学生支援が求められています。

ボランティア団体としての留学生支援の会が設立して 24 年、会の支援を受けた留学生は少なくありません。私も会の一員として、できる限りの貢献をさせていただきたいと思っています。

7 月開催予定の総会で、皆様にお会いできることを楽しみにしております。

4. 活動報告

（1）外語祭バザー

今年度の第 100 回外語祭はコロナ禍収束の傾向のなかで 3 年ぶりにキャンパスでの対面式の活動を主体に開催されました。本会でもそれに対応して 11 月 19 日（土）～21 日（月）の 3 日間、講義棟 1 階 113 教室を会場に、3 年ぶりのバザーを実施しました。

外語祭実行委員会との会場使用交渉は夏前から始まりましたが、非常に親切に対応してくれ、コロナ前に使用していた 2 階の 216 教室が承認されました。ところが、直前になって大学が実施する説明会場に使用するという理由で 103 教室に変更となりました。

通常の中教室であり、机、椅子が固定式なのでバザー会場には不適という不安もありましたが、18 日の会場準備では K 幹事のアイデアによりベニア板などを利用してプロ並みの商品ディスプレイができました。開幕してみると、1 階の入り口付近という地の利が予想外の効果を発揮し、特段の集客活動をしなくても、多くの来場者で賑わいました。次回も 1 階が良いということになったほどです。

外語祭バザーの目的は、留学生ではなく、外語祭の来客である父母、OB、地域市民の方々への物品販売を通じて支援の会の活動への理解、協力を広めながら、会の活動資金を得ることです。今回は新たな商品の募集は行わず、倉庫にあった在庫品を利用しましたが 3 日間の総売り上げは 21 万円を超え、諸経費を差し引いて 17 万以上と、例年並みの収入がありました。

期間中、特に土日には多くの幹事、協力会員が参加し、また懐かしい会員の来場もあり再会を喜ぶシーンもありました。とはいえ、事前事後の準備、片付け期間を含めて、人手不足は否めず。結果的に、一部幹事・協力者に負担が偏る傾向がみられました。今後のバザー存続のためにも、学生アルバイトの活用、会員の協力の拡大などによる人手不足の解決策を検討する必要があります。

最後に、今回のバザーに関して外語祭実行委員会 HP に「その他」企画としてではありますが「@103 教室　留学生支援の会　バザー」として紹介されました。初めてのことです。支援の会の認知度の向上を示す事実として記しておきます。

賑わう会場

留学生によるヘナのタトゥー

(1) 日本文化体験教室

12月9日（金）13時～16時、大学（留学生課）主催、支援の会共催による日本文化体験教室が、大学ホールを中心にした複数の会場で開催されました。好天にも恵まれ、ISEP 生を中心に延べ 150 人以上の留学生たちが並行開催されている 6 種類の体験教室を訪れ、講師の説明を真剣に聞き、指導を受けながら、日本文化のさわりを 1 時間で楽しんでいました。

この体験教室は、例年この時期の夜に大学主催で実施されてきたビックイベント「国際交流の夕べ」とペアにされ、「伝統文化体験教室」という名称で実施されてきました。コロナ禍により両方とも中止されてきましたが、今年度は飲食パーティーである「国際交流の夕べ」が依然中止される一方で、体験教室単独で「日本文化体験」と名を変えて実施されることになったわけです。

支援の会は以前から、共催者として、特に体験教室の講師選定や運営に積極的な役割を果たしてきました。今回も 6 つの教室のうち、着付け、華道、お茶、囲碁・将棋の 4 教室の企画運営を担当しました。以下ではそのうち、お茶教室と着付け教室の様子を報告します。（会長　谷）

お茶教室

この日文化紹介の一つである茶道を見学しました。多くの学生が大変興味を持っていたようで、事前申し込みの時点で人気の高さがうかがえました。当日は、初めてお抹茶を口にするという学生は少なく、ほとんどが観光や喫茶カフェでの体験済みとのこと。ただ、茶室にて実際にお茶を点てるのを見てお点前をいただくということは、ほとんどの学生が初体験。皆、興味津々で臨みます。参加者の皆さんに足を崩すよう促しても皆終始きちんと正座だったことに驚き、和菓子は苦手な学生もいるかと思いきや皆おいしいと口にし、全員完食(?) は意外でした。お客様を迎えたお茶室は、先生が用意して下さった美しい紅白の椿の花、黄色の実と緑の葉の彩が見事な柚子、香炉、掛け軸と、日本の和と美しさの調和で留学生をおもてなししてくれました。

先生に茶道についてのお話、所作、お道具などの説明を受けた後、いざ自分の前にお茶が運ばれそれをいただくという一連の流れの中で、一瞬真剣で少し緊張した空気が流れるのが伝わってきます。先生の滑らかで流れるようなお点前のその手元を興味深く見つめる学生たち。丁寧な時間が流れます。これも一期一会。その若い目で映し撮ったこの日本の茶道のひととき、どうぞ心に留まる 1 枚として残りますように。　（幹事　山崎）

お茶会の様子

着付け教室

三年ぶりに開催できた日本伝統文化体験の人気企画「振り袖着付け体験」（13 時～16 時）は 50 名以上の申し込みがありました！

まず、ボードに書いた申込名を、受付順にチェックしていく、着付けが終わったら 30 分の外出、戻った振り袖を机に並べる等、次から次へと時間との競争です。

並べられた美しい振り袖と帯を見つめて、好みの着物を選び、興奮気味の留学生達。着付け待ち時は髪のセット、支援の会のメンバーがピンとゴムでまとめ、髪飾りで仕上げるのですが。

6 名のプロの着付け師さんにより、華やかな振り袖姿ができあがります。留学生も鏡の中で変わって行く自分を見てとても嬉しそうです。素晴らしい着姿で、嬉々としてスマホを持ち外出して行きます。友人と写真を撮り合って楽しんでいます。お国の家族に早速送ったという学生達。お子さんの振り袖姿を見て話をして親御さんも感動、安心した事でしょう。

コロナ禍の中マスクをし、配慮しながらも留学生には素晴らしい体験になったと思います。

因みに男性は 10 名で紋服（羽織・袴）を着付けました。　（幹事　高橋）

着付けの様子

(2) 伝統芸能鑑賞教室“Discover Bunraku”

日時　12 月 12 日（月）17：45 集合～21：15 解散
会場　国立劇場小劇場
演目　絵本太功記（夕顔棚の段／尼ヶ崎の段；公演前に文楽に関する英語解説）
参加者　54 名　（留学生 43 名, 日本人学生 6 名　引率幹事・会員 5 名）
会計収支　支出　99,000 円（入場券 1800 円×55 枚）
収入　52,000 円（学生　1000 円×47 名, 引率者　1000 円×5 名）
差引き支援の会負担額　47,000 円

師走の夜、国立劇場が「外国人のための文楽鑑賞教室」と銘打って特別に企画した Discover BUNRAKU 公演を鑑賞しました。文楽という外国人留学生にとって難解で、鑑賞機会の少ない伝統的人形劇芸術への初挑戦でしたが、50 名近い参加者に鑑賞機会を提供することができました。6 月に実施した歌舞伎鑑賞と合わせて約 90 名の留学生に日本の伝統的かつ代表的な舞台芸術に触れる機会を与えることができたのは大きな成果だといえます。

授業期間中の平日夜間の実施に関しては、参加者が集まるか、当日キャンセル者が増えないか、引率幹事の負担が増えないかなどの不安もありました。にもかかわらず、平日夜間の公演を選択したのは、Discover BUNRAKU がこの日一回だけの特別企画だったからです。

Discover 企画の特徴は、英語による入門解説、英語字幕があり、かつ通常 500 円以上のイヤホンガイドが無料でその配布、回収も劇場が担当することです。外国人留学生が文楽を理解するうえで望ましい補助手段が揃っていること、それがこの企画にこだわった理由でした。そして期待にたがわず、留学生たちは初めての文楽を充分に楽しむことができたようです。数十年の修行を積んだ「人形遣い」が 3 人で操作する人形の微妙な所作と様式美、一人の男性（太夫）が舞台上の全登場者（人形）のセリフ、感情、情景を三味線に合わせて声音を変え表現する浄瑠璃語りに強い印象と感動を感じ、日本伝統文化の深みを体感した様子でした。Discover 企画の有効性を確認できたことも、今回の成果の一つです。

平日夜間の不安は杞憂に終わりました。参加数も、募集開始とともに 30 名の予定を大幅に上回る申し込みがあり、結果的には引率会員を含めて 54 名という大きな規模の鑑賞事業となりました。キャンセルも少なく、伝統文化鑑賞に対する留学生の欲求の高さが示されました。これに応え、次

皆で集合写真

年度も伝統文化鑑賞教室として春の歌舞伎、冬の文楽鑑賞を行うことを決め、良い席確保のため既に予約しました。　　（会長　谷）

参加学生の感想文

文楽の魅力

叶涛（ISEP 大学院生　中国）

文楽は太夫、三味線、人形の三位一体の芸と言われています。初めて文楽を見る私にとって、同時にこの三者を一体として把握するのが難しいですが、文楽の奥深い魅力に強く惹かれました。日本の伝統芸能というと、すぐ能や歌舞伎などが頭に浮かびますが、太夫、三味線と人形により演出された華やかな舞台を持つ文楽を実際に見て、改めて日本伝統文化の素晴らしさに感心しました。

オペラのオーケストラと比べて、三味線だけで音楽を演奏するのは一見単調のようですが、しかし、三味線一つで様々な情景や登場人物の複雑な心情を表すところこそ東洋芸術の魅力だと思います。特に音と音のあいだの「間」にも深い意味があり、この「間」は東洋絵画の「余白」とも繋がっていると思って、余韻のある美しさを感じました。そして、舞台の上には「御簾内」と呼ばれる簾がかかっていた部屋があって、音楽に立体感を与えると同時に、戦うシーンなどの場面も力強く演出されています。見えるところと見えないところがあって、文楽を見ながら、この仕組みの巧みさに思わず驚嘆してしまいました。

文楽の主な舞台は人形の舞台であって、人形による演出も主な見所と言えますが、私はなぜか床に一番惹かれていました。太夫の語りと三味線の演奏だけでも素晴らしくて、人形に目を配るひまはなかなかなかったです。床本に向かって物語を語っていた太夫はただ座っているだけに見えますが、その表情、かすかな動き、声の抑揚と緩急、そして三味線とのやりとりで、物語が鮮やかに目に浮かびます。特に語り終わりに、太夫の方が床本の上に頭を深く下げたまま床が後ろに回っていくところが感動的でした。その動作は太夫の敬意の表れであろう。長く受け継がれてきたこの伝統芸能に対する敬意であろう。たくさんの方々が伝統を大事にしているこそ、昔からの伝統が今でも活力を保つことができます。そして私たちが伝統から栄養を汲むことができるようになります。本当に、ありがとうございました。

文楽を見るのは初めてで、その魅力のほんの一部しか受け止められなかったですが、文楽の世界に入ることができました。昔から日本の伝統文化が好きで、そのために日本語を勉強し、日本に留学しに来ました。私にとって、伝統文化は美しいだけではなく、その伝統文化を守ってきた人々の精神からもすごく力をもらいました。現代社会はどんどん変化していて、人々の価値観や生活様式も変わっています。しかし、伝統を失うと、自分はどこから来たのかが分からなくなります。これからも伝統とどうやって共に生きて行くべきかについて考えたいです。

My epxerience with Bunraku

Zeynep Elif Demirel（ISEP 学部生トルコ）

In my epxerience with Bunraku, I can say that I was quite impressed with a play I have never seen before. Becuae my understand of theather plays in front of the live audience was limited to actors performing /impersonating fictional characters, at first it was difficult for me to understand what Bunraku was. Because in Bunraku, people were not acting themselves, but controlling puppet like characters. Also, three puppeteer was controlling one puppet which was quite impressive too. The most shocking detailes for me were learnig that there is schools for becoming a Bunraku performer and only people who start really young can do it profeccionally. Also, leanring that becoming a professional Bunraku performer was about 20 years was truly schoking. After watching this performance I thought that Japanese performing arts were really detailed and difficult to master because of the great

attention to detail in arts. I am really luck to see a performace I have never seen anything like before. Also, I am thankful to ISSA volunteers who were so kind to plan this activity. If they did not planned this amazing activity, I would never knew about Bunraku. Thank you so much ISSA! I loved it!

（3）大学フードパントリーへの協力

１２月２３日金曜日、外語会の寄付により大学が主催する大学フードパントリーが開催されました。今年度は初めて、通算で７回目となります。

開場は１０時予定でしたが、多数の学生が集まったので１０分繰り上げて始まりました。食品は一人分ずつ紙袋にパックされ２００人分が用意されていました。今回はお正月直前ということで、晴れやかな化粧箱に入ったお供えが目を引きました。また、大学職員寄贈のスナックも用意されており、一人３個まで好みの味を楽しそうに選んで持ち帰っていました。嬉しいサプライスだったに違いありません。コロナ禍、外語会や大学職員の学生に対するサポートに頭が下がります。

最初の人波が１０時２０分頃一旦途切れると少し間が空きましたが、２時間目の授業が終わった１１時４０分頃に最後の人波が押し寄せ、用意された配給品はなくなりました。

大学パントリーには、これまで可能な限り協力参加してきましたが、直前に開催を知ったこともあり、今回は支援の会としてはパントリーへの協力参加は見合わせ、来場する留学生を対象に質問票を用いたインタビューを行う予定でした。ところが、タイミング良く食品のご寄付をいただいたので、それを持ち込むことにしました。ご寄付有難う御座います。

当日は、会長と幹事３名が参加、会場の出口前に支援の会のデスクを設け、パックご飯、レトルト食品、缶ドリンク等の中から一点を選んでもらい、その後で空いたテーブルに着席して、質問票に記入してもらい、時間的に余裕があればインタビューに答えてもらいました。フードパントリーの主な利用者は日本人学生ですが、支援の会のデスクに立ち寄り、質問に回答してくれた留学生が30名いました。少なくとも利用者の１５％は留学生であることが確認できました。私達の呼びかけに対する留学生の反応も好意的であり、直接話しながら、パンフレットを手渡し、支援の会の説明と行事紹介を行い、これからのイベント募集の際は申し込むように呼びかけることが出来ました。

日本人学生サンタの飛び入り応援も

30名とのインタビューを通じて、外国人留学生も日本人学生と同様、依然として厳しい生活条件の下に置かれている事実を再確認しました。

（幹事　小平　京子）

(3) コロナ禍 3 年目の生活支援事業の継続

今年度はコロナ禍収束傾向の下で、2 年間断念してきた交流、文化理解事業に積極的にチャレンジしてきましたが、それらが一段落した 12 月から 1 月にかけ、インフレにより一層深刻化しつつあるといえる困窮化への対応策として、昨年と同

規模の「生活支援の継続」事業を実施しました。以下は外語大の全留学生を対象に取り組んだ、生活給付金 3 万円支給事業、小論文投稿者への生活応援券 3000 円分配布事業、生活調査回答者への生活応援券１000 円分配布事業についての報告です。

１）ポストコロナ時代の留学生の学び継続を支援する生活給付金事業

コロナ禍は収束に向かいつつありますが、国際的なインフレーションの影響もあり、生活の困難や不便を抱えている学生は増加しています。特に、充分な奨学金をもらっていない私費留学生、育児のためあまりアルバイトが出来ない女性留学生の生活困窮が懸念されます。このような留学生の学びの継続を支援するため、２０２０年度、２１年度（２回）に続き、皆様からのご寄付を原資に４回目となる生活給付金事業を実施しました。

今回は、前回同様 ISEP 生以外の私費留学生全体を対象としながら、支給額を 5 万円から 3 万円に減額することで支給人員の拡大（２０名→３０名）をはかりました。

12 月 5 日、（1）日本政府奨学金（国費奨学金）あるいは月額 12 万円以上のその他の奨学金を受給していない、（2）コロナ禍のためアルバイト収入、家族からの送金が減少して、生活に困っている 2 要件を申請条件として HP で告知し、メールでの申請受付を開始したところ、12 月 19 日の締め切りまでに実に 61 名からの申請がありました。前回に引き続き育児でアルバイトが出来ず、生活に困っている女性留学生を特別枠としましたが、今回は条件該当者がいませんでした。

支給者の選考は本学教職員 2 名を含む 7 名の選考委員会を設置し、申請書記載の理由、生活費収支明細を基本資料にして審査しました。審査に際しては、年齢、所属、家族構成などが大きく異なる申請者の生活困窮度をより公正に比較するため、奨学金や授業料免除額を加算、控除した「実質月収」を算出し、10 万円（貧困線）、13 万円（生活保護額）を目安に 4 段階に区分したうえで、その他の要因（送金依存率、アルバイト依存率、貯金取崩額、勉学専念の緊急性など）を加味して支給の可否を慎重に検討しました。

２０２３年１月１４日の最終判定会議で３０名の支給を決定しました。内訳は、学部生６名、研究生２名、大学院前期１０名、大学院後期生１２名です。決定を通知した後、会の連絡室での面談を必須条件とする手続きを経て、１月２４日までに全員の指定口座に振り込みました。

審査の過程を通じて、コロナ禍による親の仕事の減少（仕送り低下）、インフレの影響など切実な困窮の実態がさらに拡大している印象を受けました。今後も留学生の実状を注視しつつ、より適切な支援に努めてまいります。皆様の支援、協力をお願いします。　　（幹事　河野貴光）

２）留学生の協力に対する謝礼事業

留学生には会が必要とする情報などを提供してもらい、会からは食事や書籍購入の足しになる少額の商品券を提供するという相互支援の理念による事業です。昨年度に引き続き、小論文の寄稿者、生活調査への回答者に対し少額の商品券を「生活応援券」として配布しました。

小論文は、「コロナ禍の 3 年間を振り返って」をテーマとして 1000 字とし、30 名を上限として投稿者に 3000 円分の QUO カードを配布することにしました。12 月 27 日～1 月 23 日の募集期間中に 18 名の投稿があり、「応援券」を手渡し、ないしは郵送しました。

昨年度は投稿者の大部分が日本語力の高い大学院在籍の中国人留学生でしたが、今年度は欧米からの ISEP 留学生の投稿がかなりあります。これらは、日本語表現の誤り、不完全さはありますが、大学や日本社会のコロナ対策の問題点を率直に指摘している点で、興味深くかつ参考になるものです。5 名の投稿文を「留学生の声」欄に掲載したので、是非お読みください。

今回で 3 回目となる「生活調査」は、回答謝礼

としての QUO カードの額面を 3000 円から 1000 円に減額して実施しました。設問は基本的には前２回と同じにしましたが、コロナによる生活の変化に関しては、これまではコロナ前と現在を比較する設問だったのに対し、コロナ中と現在を比較するものに変更しました。募集期間は小論文と同じで、２３名の回答がありました。残念ながら前回の半数以下でした。謝礼の減額、実施期間の重なりによる競合の影響かもしれません。回答の集計分析はこれから行う予定です。　　（会長　谷）

(4) アフガニスタン元留学生・家族への支援

前号でも報告したように、昨年 8 月末以来、東京外大ではタリバン復権により苦境に陥った 2 名のアフガニスタン人元留学生とその家族の緊急退避を受け入れています。支援の会も、7 月の総会での学長からの要請を受け、微力ながらも日常生活の相談や支援に取り組んでいます。

この 2 家族は、支援の会連絡室がある国際交流会館 2 号館に居住する、いわば隣人であり、困ったことや必要なものがあると連絡室に顔を出されます。先日も、一方の家族の小学五年生の少女が、もう一方の家族の夫人と連れ立ってきました。ご夫人はアフガン語しか使えない様子で、英語と日本語を片言で話す少女が通訳として付き添ってきた感じです。

何か必要な物があるようです。でも少女の英語と日本語ではよくわからず、ホワイトボードに絵を描いてもらって、ようやく車椅子生活のお祖母さん用の介護トイレだと分かりました。それは支援の会では無理だと説明しましたが、ご夫人は大皿も欲しいということで、連絡室にある食器を見てもらい、気に入った数点を持って帰っていただきました。

まさにかつての長屋生活の一コマのような光景ですが、支援の会では連絡室のドアを開いて、話し相手となり、可能な範囲での支援を継続していきたいと思います。　　（谷）

今回、上記の少女の父親であり、カブール大学助教授であった元留学生 Hasibullah Mowahed 氏に、アフガニスタンからの緊急退避に関する経験を寄稿いただいたので、以下に掲載します。同氏は現在本学非常勤講師として経済学を教えてみえます。

From Kabul to Tokyo

Hasibullah Mowahed

I am one of the millions of Afghans who have experienced a difficult life in the last 40 years which is from the Soviet invasion in 1979 to the USA failure in 2021. Afghanistan was one of the most peaceful countries in the 1960s and 1970s and many foreign tourists were visiting it every year. I was born in Kabul, Afghanistan, and finished my schooling there, I entered to Kabul University and graduated in 1995. I got a scholarship from JICA and continued my education at TUFS. After returning to Afghanistan, I started working as a lecturer at Kabul University and on the same time I was working as Deputy President General of the Statistics Organization of Afghanistan. I worked there for 10 years until 2021 there and at the same time, I was teaching at Kabul University.

The security situation getting worse every day and the Taliban were taking over one province after another one. Finally, the government of Afghanistan collapsed and the Taliban could occupy Afghanistan on August 15, 2021. In this day, not only the government but the hopes and life of the people were destroyed. US troops were staying at the Kabul airport and controlling it. US and some NATO member countries military aircrafts wanted to evacuate those who were affiliated with their related organizations. Furthermore, employees of US embassy were transferred by helicopters to the airport and from there to the United States.

TUFS contacted me in the first week after the ruling of the Taliban for the evacuation. On August 26, 2021,

two Japanese aircraft from Japan Air Self Defence Force (JASDF) arrived in Kabul to evacuate employees of Japan embassy and those who were working with Japanese organizations such as JICA as well as some alumni of Japanese universities. On August 27, 2021, a heavy explosion happened at Kabul airport and the Japanese airplanes left Afghanistan with only one passenger who was Ms. Hiromi Yasui. After one year, I could with my family to leave Afghanistan for Iran and from there to Japan. We arrived in Japan on August 31, 2022.

It is clear that migration and any relocation from one country to another have many problems. Since we had the experience of living in Japan, thus there was no cultural shock, but the financial issue is one of the important matters of survival. Learning of Japanese language is the most important issue to live in Japan. Living in Japan for six months showed that we can cope with these problems with the cooperation of the kind people of Japan.

Maybe peace will be restored to our country a day and we will be returning to our country, but will never forget the kindness of the people of Japan. We will keep this kindness and love in our hearts utile the end of our life.

In the end, I hope to have a world free of deadly weapons, free of war, forced migration, and poverty.

(5) 準備中の事業

今年度はコロナ禍により断念してきた交流、文化理解事業に積極的に取り組み、既にコロナ以前の水準を凌駕する参加者数を達成した。とはいえ、各種の小旅行事業は未だ再開できていない。そこで、例年２～３月に実施されてきた富士ツアーおよび鎌倉史跡見学を再開すべく、昨年秋から検討を開始した。

残念ながら前者は現地協力者の方々が、現時点での実施に慎重な判断をされ、コロナ禍の全面収束を待つことになった。けれども後者に関しては、３月５日（日）に実施することを決定した。さらに、歩き、身体を動かすことへの欲求が高いことを考慮し、富士の代わりに大学近辺の深大寺まで歩いて史跡、自然景観とソバを楽しむ、半日の深大寺ウォーキングを２月１７日（金）に敢行することを決定した。

両企画とも現在参加者募集中だが、非常に好評であり、定員超えは確実である。実施結果は次号にて報告する。　（会長　谷）

史跡見学ツアー再開について

支援の会では約４年振りとなる、史跡見学ツアーを再開いたします。今回は早春の古都鎌倉を訪れ、その歴史、景観、味覚、自然を体験し、楽しむ日帰り旅行です。

【開催内容】

1. 日 時:３月５日（日）10:00 ～16：00
   10：00　鎌倉駅に集合江ノ電で「長谷」へ移動
   10：30　長谷寺、高徳院(鎌倉大仏)見学
   12：15　昼食　（和食、ビーガン対応可)
   13：30　江ノ電で「鎌倉」へ移動
   14：00　銭洗弁天、鶴岡八幡宮を見学
   16：00 小町通りで解散
2. 場所：　鎌倉（神奈川県）
3. 参加費　1,000 円　（入場料、昼食代、交通費の大部分は支援の会が補助します)
4. 募集人数 35 人(留学生および日本人学生)

（幹事:河野）

4. 留学生の声

(1) 留学生リレー投稿

祭り

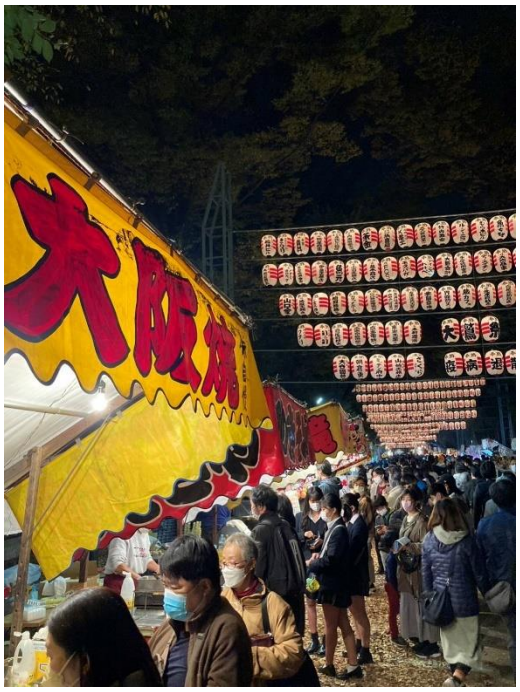
ピエホ　レシチャ
（ISEP 学部生　ブラジル）

外国へ出発の時、「一年」ということは長いと感じるが、日が経つにつれて「一年」ということはとても短いと分かってくる。一年間に一つの体

験が一回ずつ得られるわけだ。そのため、私は唯一の体験を重ねたいとした。博物館やレストランなどが思いがけない場合以外、いつでも経験できる。しかし、祭りは一年間に一回だけある。それで、毎週の祝日を調べ、予定を選ぶ。

日本についたばかり、酉の市が行われていた。他の留学生と一緒に、外大の近くの大國魂神社で初めての祭りを楽しんだ。きれいな提灯が吊られたり、いろいろな屋台が並んだり、大勢の人の声が聞こえたりすることが素晴らしい雰囲気を作ると思った。日本のメディアでよく祭りを見たこともあるし、宗教学に興味のある私が祭りに関することをもうよく読んだこともあるし、どんなイベントのかもう分かったと思った。しかし、自分自身で経験するのが全く違うことだ。「鉄道オタク」について聞いたこと多くあるが、その日に「祭りオタク」になってしまったかもしれない。

あの日から、お正月や節分などを寺と神社で楽しんだ。祭りに行くたび、新しいことを習い、日本語能力に自信が高くなっていく。どうすればいいのか分からない場合にも、他人に聞くといつも優しく答えてくれた。帰ると、国の伝統的な祭りも初めてのように楽しみたい。祭りが文化の経験にすごいものだと思うから。



(2) 小論文募集への投稿論文から

コロナ禍の 3 年間を振り返って

柏　匡（大学院後期課程　中国）

東京外国語大学に入学したのは 2018 年の 4 月で、その頃はまだコロナの「コ」の字もなく、振り返ってみると、今や信じられないほど自由自在に大学の教室や図書館で勉強できていました。そしてこのような日々が 2 年後の 2020 年 4 月頃のコロナ第 1 波のピークが襲来したことで終止符が打たれました。今にも鮮明な印象として残っているのはコロナの第 1 波が来た時、この未曾有のパンデミックにものすごく恐怖していた自分がいました。その時はまだコロナに対する対処法も経験も少ないため、学校にいる時にせよ、アルバイトをする時にせよ、とにかく恐る恐る他人と距離を取りながら行動していました。そして恐怖心に駆られてだんだんマスクを手放せなくなって、家の玄関にも常にアルコール消毒液を置くようになりました。たしか記憶にはマスクとアルコール消毒液が品切れになるくらい皆がコロナに厳重に警戒していました。

その後、大学もコロナの感染拡大を防ごうと、2020 年の秋学期から非接触型のオンライン授業という授業形式を積極的に取り入れました。今までやってきた対面形式の授業と違って、家にいても先生、ゼミの先輩後輩、そして他の同期生とちゃんとコミュニケーションが取れて最初は新鮮で面白がっていました。しかし、時間が経つにつれて少しずつオンライン授業のデメリットを感じるようになりました。真っ先に直面したのはハード面での問題でした。オンライン授業はパソコンなどの電子機器を使わないといけないが、自分のパソコンはすでに 10 年落ちの型で、処理能力は大分衰えてきました。そのせいで、オンライン授業の時には度々画面が止まったり、音声が途切れたりするような不具合が起きていました。またパソコンのみならず、授業を受ける際は今まで生で先生の声を聞くのと違って、スピーカーやイヤホンを

つけて聞くので、音声環境が授業内容の理解により影響すると言えます。授業の内容をよく聞き取れないことで心の中で引きずって、しまいには授業に集中できなくなることが多々ありました。これらの問題を解決すべく、自分は思い切って新しいパソコンと音質のいいヘッドホンを購入し、やっと授業に身が入るようになりました。このほかにソフト面にも実は問題がありました。Zoom などのミーティングソフトウエアを使ってオンライン授業を受けているので、ある程度の通信速度が求められます。そのために、自分は 2 年も住んでいた家賃の安いアパートを解約して、通信環境のいい今のマンションに引っ越しました。今の家は光ファイバー回線が使えて通信環境は以前より快適になりました。その代わりに家賃も以前より 2 万円ほど上がったのですが、これも勉強のためだと思えば納得が行きます。

コロナがまだ感染爆発していない 3 年前には、コロナをただの新型インフルエンザのように私は思って、高を括っていました。しかし、3 年後の今もその影響が私の生活の隅々まで残っていて、ここまで私のライフスタイルを変えてくれたのは思いもよらなかったです。たった一つのウイルスが連鎖反応して、人の生活ないしは社会全体にこれほどの天変地異をもたらしたことにただ驚くばかりです。

あきらめなかった日本留学

ジェンナーロ　ペツォーネ
（ISEP 大学院生　イタリア）

この新型コロナウィルスのパンデミックの 2 年間は、私にとって大変な時期であった。2020 年に日本への留学を始める予定なのに、その予定が 2022 年 5 月に延期になった。留学が何度も延期になったので、日本で勉強する夢をあきらめようと思うこともあった。しかし、希望を失わないために、いくら困難があっても日本語の勉強を続けることにしたのである。毎日、新しい漢字、文法や文型、単語を勉強して、そのように続けながら、日本へ行く決意を固めるようにした。

日本に来て、コロナに対する対策のイタリアとの違いに気づいた。日本で、マスクが使われている。イタリアなら 2022 年以降、ウイルスの危険性の認識が弱まり、多くの人がマスクを外すようになった。日本でのウイルス対策は良かったが、2 つのことに対する批判がある。第一は、日本への到着に関するもの。4 月上旬に来日して対面の授業を受けられた友達と違い、私は 5 月末に来日し、オンラインだけでの授業を受けることになった。理由はわからないが、コロナがこの遅れをなんとか引き起こしたと思う。また、日本に来てから、春学期に対面の授業を受けられなかった。2 つ目は、コロナに対する制限についての問題である。そのため、規制が厳しすぎて効果がないほどということについて考えることが多かったのである。例えば、日本の学寮に入ってからがっかりしたのは、キッチンなどの共同スペースを活用することで、新しい人と知り合うことが難しいことであった。そのような場所でも入念な消毒とマスクの使用で、問題なく使用できるだろうと思った。残念ながら、そのような可能性がなかったため、寮内での他者と出会うことが複雑になった。

それはさておき、大学側のサポートが充実していたことである。学生課では、アドバイスなどを通じて、常に学生をサポートしてくれた。パンデミックが終わったら、日本に残っているコロナに対する規制を一刻も早く撤廃してほしいものである。しかし、多くの人々がより簡単に仕事を見つけられるよう、国の経済が回復することが最大の望みである。そして、いつか日本に戻って仕事ができるようになりたいと思っているが、その前にイタリアに戻って卒業しなければならない。いつ日本に帰れるか分からないが、その前に日本語の勉強を続けて、帰国したときにはもっともっと上手に話せるようになりたいと思っている。そうすると、留学生である私でも就職しやすくなるのを期待している。

コロナ禍の３年間を振り返って

陳孜伃（ISEP 学部生　台湾）

コロナ禍のために、日本の留学が予定より一年遅れになりました。台湾にいった時、毎日日本政府からの入国政策を注目したり、早く緩めるように祈ったりしました。そして一年後 2022 年の秋、やっと日本に来ました。ワクワクな気持ちで日本の新たな生活を始めようと思って、東京外国語大学の綺麗な寮に入りました。けれども、最初の一週間は授業と活動もなくて、寮の中でも別の学生もなかなか会えずに、寂しいでした。一日の中で少なくとも人間と話したいですので、毎日台湾の友達を電話しました。それで、オンラインの授業とはいえ、幸いに授業が始まって、話す相手ができました。聞いてみると、皆も私みたいな寂しい一週間を過ごして、一緒に何をする友達が欲しいでしたので、皆すぐ友達になれました。それから、運動したいのため、自分からテニス部活のインスタアカウントに DM して、テニス部活を入って、たくさんの日本人と他の留学生と仲良くなれました。それぞれの文化と言語について話し合って、楽しかったです。

どころが、他に少し困ることもあります。それは日本の生活費です。台湾に比べたら、特に交通費と電気代が高いと思います。毎月の末に、三号館の皆さんの話題は自分の電気代の値段と節電の方法です。ある人は暖房をつかないように、できるだけ暖房を無料にできる一階の共有室にいると決めました。ある人はお風呂のお湯の設定を一時的オフします。そして、自分部屋の冷蔵庫のプラグまでを抜くようにする人もいるらしいです。私の場合は節約の同時に、貯金したいですから、バイトをしています。フランスレストランのホールスタッフとして働いています。外国人の私を採用してくれて、本当に感謝な気持ちいっぱいでした。オーナーは私のためにわざと簡単な日本語を使っていますが、でもやはり学校と違って、レストランに聞いたことがない言葉が山ほどあって、フランス料理のマナも学ばなければならないですから、すごく大変でした。でもこの困難な経験にも、貯金のためだけではなくて、未来にいい勉強になれるのでしょう。

日本に来て、外国人に対して、学校の先生とスタッフだけではなく、優しく接してくれた人がたくさん出会いました。コロナ禍のせいで、時々寂しさと厳しさを感じていますが、やっと日本に来られて、日本文化の思いやりを実際に体験できるのはありがたいとおもいます。コロナの間としても、続きの日本生活はもっとたくさんの人々と繋げって、知識と感情の交流ができたら、いいなと思います。

コロナ禍の３年間を振り返って

ラーソン・ベンジャミン
（大学院後期課程：アメリカ）

コロナウィルスは私に大学院生・研究者として、教師として、留学生として悪い影響を与えた。大学院生・研究者として、研究テーマの学習活動を観察する機会が少なくなった。塾で働く教師として、一時的に対面式授業が休講になり、オンライン式の仕事のみでき、そして対面式授業が復帰してもマスクを着けているため生徒の発音を上手く矯正できなくなった。留学生として、経済的な負担を担うことが難しくなった同時に、母国の親戚に会えなくなり手伝いをもらえなくなった。

私の研究テーマは対面式タンデム学習のアドバイジングである。タンデム学習とは、二人の違う言語を母語にする学生がペアになり、お互いの言語の学習を助けるとうことである。例えば、スペイン語を学んでいる日本人学生が日本語を学んでいるメキシコ人学生と一緒に日本語とスペイン語を学習することである。タンデム学習は主に自律的な学習活動であるが、参加者がどのようにタンデム学習をすればいいか分からない時、アドバイザー（手伝う人）にアドバイスを求める場合がある。コロナウィルスの流行によって、大学でのタンデム学習の活動を全部オンライン式で行わざるを得なくなった。問題のあるペアたちを特定し、

援助を提供することが難しくなった。一方、コロナの流行がオンライン式のアドバイジングを試みる機会になっている。

研究しながら５人家族を養うことがコロナの影響で難しくなった。コロナの流行が始まる時、私が働いている塾の対面式授業が一時的に休講になり、オンライン形式になったため、給料も下がった。その上、英語母語話者である私がオンライン式で生徒の口の動きも見えないから、発音を矯正することができなくなった。そして、討論などを行うことが難しくなった。対面式授業が復帰しても、生徒が全員マスクを着けているため、発音をはっきり聞こえなく、口の動き見られないから、発音の矯正がまだできない。

留学生として、コロナは「橋を破壊した」という影響があった。私とアメリカにいる親戚が一時的に会えなかった。そして、中国にいる妻の親戚は今も会えない。英語で「Corona baby」と言われる 2020 年に生まれた長女と 2022 年に生まれた次女と三女が母国であるアメリカに一回も行ったことがない。そして、親戚の内、アメリカ人のおばあさんのみ会っている。インタネットで連絡取れるが、対面できなく辛い感情である。

日本の政府が援助金などを出しているし、コロナ審査を実施している。そして、日本の市民は大部分マスク着用に協力している。外国人である私の視点からみると、日本は積極的に感染対策を行っている。それに加えて、入国規制を緩和し、対面式活動を行うことを容易にする仕組みを取れればいいと思う。

コロナの 3 年間を振り返る

マックス・ダニエル
（国費研究生大学院　ブラジル）

コロナが流行り出してからもう 3 年間。どれだけ生活が変わってきたかを考えてみれば、それは大分昔のことのように感じる。思い出せないくらい変わってきたかもしれない。確かにパンデミックという言葉を毎日のように聞く時が来るなんて思いもつかなかった。もちろん病院を見たらウイルスで苦しんでいる人がどれだけいるかすぐにわかるが、それ以外の形で辛い目に遭っている人もいる。病気とともに来た様々な制限が与える影響によって生活が困難な状態になってしまう人のことである。思い出しながら私の経験を語ってみる。

来日したのは昨年 11 月で、ちょうど日本でのコロナの感染者が増えていたところだった。日本での生活に対する楽しみの気持ちとパンデミックに対する不安な気持ちが混ざっていた。空港では PCR 検査を受けて陰性。そのあと大学に行くかと思ったが、ブラジルで注射したワクチンが日本で認められないためホテルで隔離するように言われる。日本と同じメーカーのワクチンを受けていますよと自分の書類を見せたら「あなたの国はリストに入ってないからしょうがないよ」という説明をされた。

16 日の隔離の結果は 20 万円程度の借金を生んだ。日本に来る際はお金を貯めて持ってきてくださいと言われたが、そもそも国でもコロナ禍でみんなが経済的に困っていたのでそんな金額をそのまま持っている人はほとんどいなかったような気がする。いずれにせよ、やっと隔離から出られたのに経済的に不安定な状態になっていた。

ワクチンを 2 回だけ打ってきたので 3 回目以降を日本で打つことになった。その時にワクチン予約制度にびっくりした。ブラジルでは、会場が混まないように年齢と性別に分けられることになっていて、予約は不要。その一方、日本ではインターネットで登録したり日付と時間を早めに予約しないといけないことになっていた。便利に見えるけど実際に不便だと思う。予約したい人が多くて予約できる時間枠はすぐに無くなってしまう。その上に、1 と２回目を日本で打っていないせいで書類を郵送したりしないといけない。その結果注射そのものができるのに時間がかかってしまった。もっと効率的な方法がないかなとずっと思っている。

それらのストレスのなかでいい経験もあった。友達から聞いて、私が住んでいる府中市のコロナ

禍で経済的に生活に影響があった人のための支援プログラムがあることを知った。その中で毎月無料で食料配分を行う支援に何ヶ月もお世話になった。このように、少しずつ生活が回復してきて、気づいたらコロナの存在が日常の一部になってしまった気がする。

思い浮かべるのはこれくらいだと思う。この状況に慣れてあまり何も考えないようになってしまった気がするけど、それはやっぱり違う。ウイルスが消えるまでにどれくらいかかるかは知らない。しかしいつかマスクを外しても大丈夫だという時期が来ることを信じたい。この不安定な状況の中でもどうか希望を持ちながら生きていきたいと思う。

5. 会員から

入会のきっかけとなったホームステイ受入れ初体験

小平　京子（幹事）

私は２０１５年１１月に留学生支援の会に入会しました。何でもすぐに忘れてしまいますので、ノートに書いてあります。振り返って、よく続いているなと感心します。会費の振り込み用紙に、東外大卒業生、職員、保護者、近隣住民、その他とありますが、近隣住民、またはその他です。入会のきっかけは今の幹事長から、留学生のホームステイを依頼されたことでした。すんなり引き受けたわけではありませんが、幹事長の日頃の活動を知っていたこと、娘が留学した時に現地でお世話になったので、何時か自分も恩返しをしたいと思っていたこともありお引き受けしました。

期間は１週間、全く会ったこともない若者に狭い我が家でどう過ごしてもらうか、食事は、家の鍵は、洗濯ものはと、取り留めもなく課題が沸いてきました。でも自分でも不思議ですが、あの時に「だから出来ない。」のではなく、珍しく「どうすれば出来るか？」と考えられたことでした。部屋は、娘の使っていた部屋にベッドがなかったので床に布団を敷きました。鍵は、私か主人のどちらかが何時も家にいれば預ける必要なし。食事は、学生に食べられないものを聞けば良い。洗濯は、大きな洗濯ネットを渡して、その中に入れて出してもらいました。私は一緒に洗濯機へ入れ、終わるとそのまま返しました。自分でベランダに干し、取り込んでもらう。私は一切洗濯物に触れない。また、こちらの要望は初日に伝える。脱いだ靴はそろえる。朝食は７時半に一緒に、昼夜の食事については、不要な場合事前は事前に連絡すること、主食、ごはんは自分で盛る。食事量の調節を自分で出来るようにと考えました。行動は自由、無理に私達と一緒に居間で過ごす必要はなく、自分の部屋や外で過ごしてもらう。等々です。

ホームステイをして一番感心したことは、彼らが本当に自然体だったということ、必要以上に遠慮もなく、あきれるような無作法なこともありませんでした。彼らにしても、全く見ず知らずの家で見ず知らずの人達と寝食を共にする。一体どうしたらあんな風に自然に振舞えるのか、私が最も見習いたい点です。私が受け入れた人達は１週間が限度の短期間ステイでしたが、初めての時、私にも出来たという思いで一杯になりました。というのも、娘から「お母さんには絶対出来ない」と言われていましたので。彼女の言い分では、もっと大らかな、心の広い人でなければ無理だと言うのです。長年の課題を一つクリアし、大人の階段を一段上れた気分になりました。

留学生にとっての蜘蛛の糸としての支援の会

博士後期課程　国際日本専攻
甘利実乃

私にとって留学生支援の会との初めての本格的な出会いは、私が当時外大から客員講師およびGJO コーディネーターとして派遣されて勤務していたセルビア共和国のベオグラード大学からコロナ禍で一時帰国していた際に、外大に国費留学していた教え子たちが帰国することになったとき

だった。

別段、留学生課に苦言を呈したいわけではないのだが、その期の日研生は運の悪い状況に置かれていた。国際交流会館に入ることができず、自力で物件を借りるように言われていた。しかし、「ならず者国家」扱いされ、国際的に孤立し、経済的にも極めて苦しい立場に置かれているセルビア人にとっては、それは厳しすぎる条件だった。セルビア人の平均所得は、日本の10分の1程度であり、国費留学生への給付金が実際に出る前にホテルに滞在して物件を探すというのは夢の国のお伽噺だった。ましてや、在日セルビア人は極めて少なく、なかなか頼れない。そこで、セルビアの私と東京の私の姉とでアパート契約を不動産屋と大家さん（元々は私の住んでいた物件）の協力を得ながら進め、来日その日から寝床を確保することができた。

彼ら外大に留学中の教え子たちは、時々ネット経由で「バザーで机をゲットしました！」などと、嬉しそうに報告してきてくれた。他にも食器なども手に入れたようだった。もっとも、「留学生支援の会」という主催団体の名前は伝え聞けなかったのだが、話を聞く限り、外大では留学生を支援してくれるボランティアが充実しているのだろうと想像できた（私も学籍上外大生だが、わずか 3ヶ月の学生生活でセルビアに赴任したので学内事情に疎かった）。

さて、ここで冒頭に戻る。彼らが帰国するとき、それまでにため込んでしまった大量の物の処分をどうしようか困っていると相談された。セルビア人にとっては使える物を捨ててしまうことは選択肢にはない。そこで発見したのが支援の会の HP だった。早速私が電話をかけたところ、すぐに車でアパートの近くまで来てくださり、全て持って行ってくださったのだった！

最近の留学生は昔よりも豊かそうに見えるという話は聞く。しかし、まだ全員ではない。留学生支援の会がそうではない留学生を発見し、その柔軟性を持ったフットワークの軽さで支援していくことほど、本当に困っている留学生にとってありがたいことはない。まさに天から垂らされた蜘蛛の糸なのである。しかも、留学生のプライドを傷つけないように、優しく糸を垂らしてくれるのである。

ご入会・ご寄付、ありがとうございます

新規加入者

今期は、これまで会の活動に大いに協力してくれていた外大の大学院生が入会し、早速本号に寄稿してくれました。嬉しい限りです。

■一般会員（敬称略）
（令和4年11月3日～令和5年2月5日）
甘利実乃

寄付者

今期も多くの寄付を頂きました。ウクライナ人留学生の窮状を案ずる協力者の方からは、会として前例のない高額の寄付を頂戴しました。まことに有難くかつ励まされる思いでおります。

幹事一同、皆様のご厚情に対し、ここに改めて敬意と感謝を表するとともに、皆さまの崇高な志を留学生たちに届けるべく支援活動に取り組んでまいります。

■一般寄付（敬称略）
（令和4年11月3日～令和5年2月5日）
片岡護　安藤浩行　伊藤眞由美　小野玲子
小平京子　五味和行　佐久間美知　新谷盛雄
頼母木久代　楡木宏史　野本京子　平山廣二
前田稔　松下宗柏　松本由紀子　米山智榮子
上原美穂子

幹事会から

（１）幹事会の開催

以下の日程で幹事会を開催しました

11 月 27 日（日）　12 月 18 日（日）

1 月 22 日(日)

（２）ご寄付のお願い

コロナは収束傾向にありますが、ポストコロナ時代の新たな課題への取り組みを進めるためにも、今後ともご支援、ご協力をお願いします。

振込先

ゆうちょ銀行

口座番号　00130-3-192674

加入者名　東京外国語大学留学生支援の会

＊他金融機関からの振込用口座番号は以下になります＊

当座　〇一九店 0192674

（加入者名は同じです。）

注：ゆうちょ口座をお持ちの方は、振り込み時に「現金」ではなく「通帳・カード」を選択すると、手数料不要となります。

令和 5 年 2 月 5 日現在

会員数:877 名

すべての活動は皆様の会費とご寄付で行われます。本年度会費を同封の振込用紙にて振込みくださるようお願いいたします。

平成 30 年度新入学の会員の皆様は、前納頂いた 4 年分会費の期間が終了しております。年度内に会費を納入され、引き続きご協力いただければ幸甚です。

ひとりでも多くの方々の納入のご協力をお願い申し上げます。

一般会員：年会費　3,000 円

協賛会員：年会費 20,000 円

既にお振込みの場合、失礼をご容赦ください。

編集後記

今号では数多くの活動報告ができました。お忙しい中、原稿を書いていただいた皆様に感謝いたします。また各活動を担当なさった方々、本当にありがとうございました。次号も会員の皆様にいい報告ができるように活動していく所存ですので、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

（山根）

外国人留学生の原稿は、原則としてそのまま掲載しております

お問い合わせ先

〒183-8534 東京都府中市朝日町３－１１－２

東京外国語大学国際交流会館 2 号館 1 階

留学生支援の会連絡室

Tel:042-330-5803

Fax:042-330-5189

Mail: ryugakuseishiennokai@gmail.com

Homepage: http://www.tufsissa.com

Facebook: http://www.fb.me.tufs.issa2

当分の間お問い合わせはメールでお願いします。

©Copyright 2022, TUFS International Student Support Association

春期バザー開催のお知らせとバザー用品ご寄付のお願い

開催日時:2023 年４月６日(木)～４月７日(金)（7 日は日本人学生も歓迎します）
会　　場:国際交流会館２号館交流ホール

コロナ禍により 3 度にわたって中止してきた春期（4 月）バザーを 4 年ぶりに開催します。留学生たちの生活を支えるバザーを成功させるため、会員の皆さまにご協力をお願いします。

なお、バザー用品の提供に際しては、以下の事項をご確認ください。

１　バザー用品受付期間　　3 月 27 日（月）～3 月 31 日（金）

宅配便等で用品を送付される場合は、上記期間中の 13：00～16：00 に配達されるよう配送業者にご指定ください。恐縮ですが、送料はご負担ください。

２　提供いただきたい物品

台所用品

小型調理器具（鍋、フライパン）、電気炊飯器、電子レンジ、トースター、電気ポット、食器、保存可能な食品など

日常生活用品

タオル、毛布、衣類、小型電気製品など

和　服

男性羽織・袴一式、振袖、帯など（国際交流事業での「着物・着付け」体験などに使用）

＊一人で持ち運びできない大型家具、大型家電製品は受領できません。
＊電気製品に関しては安全性をご確認ください.
＊タオル、毛布、衣類等は未使用あるいはクリーニング済みのものをお願いします。
＊書籍はマンガのみ受付けします。

３　提供物品の送付先

〒183-8534 東京都府中市朝日町３－１１－２
東京外国語大学国際交流会館 2 号館 1 階
留学生支援の会連絡室
TEL：042－330－5803（平日午後のみ）

◎バザー実施のための人手が足りません。物品の仕分け、会場での留学生への対応、会場の事前準備と片付けなどの作業への会員の皆さまの協力、参加をお待ちしています。

物品の提供および会場作業への協力など、バザーに関するお問い合わせは支援の会バザー担当までメール(ryugakuseishiennokai@gmail.com)でお寄せください。